

Japanese Institute of Landscape Architecture

学会広報

平成二十二年七月二十九日発行

第22巻・第1号

平成23年度全国大会案内—研究発表論文集の投稿申込について	1
造園夏期大学開催案内	9
平成22年度日本造園学会北海道支部大会案内	10
◇ 東北支部大会案内	11
◇ 関東支部大会案内	12
◇ 中部支部大会案内	13
◇ 関西支部大会案内	15
◇ 九州支部大会案内	17

平成21年度北海道支部大会研究・事例報告発表会抄録	18
◇ 東北支部大会研究発表会抄録	24
◇ 関東支部大会事例・研究発表会抄録	26
◇ 中部支部大会研究発表・事例報告会抄録	32
◇ 関西支部大会研究・事例発表会抄録	38
◇ 九州支部大会研究・事例報告発表会抄録	44

〈編集〉(社)日本造園学会事務局

〒150-0041 東京都渋谷区神南1-20-11 造園会館6F
TEL 03-5459-0515、FAX 03-5459-0516

■平成23年度ランドスケープ研究論文集（全国大会研究論文集）への投稿論文募集のお知らせ

平成23年度ランドスケープ研究論文集（全国大会研究論文集，ランドスケープ研究第74巻5号）の投稿に関して、下記のように決定いたしましたので、会員の皆様にお知らせいたします。ふるってご応募ください。

今回より最終原稿の提出形式について変更を行い、完全版下となるPDFファイルで提出いただき、印刷に際して組版を行わないこととしました。またこれにあわせて掲載料等の一部を変更しました。詳しくは投稿規定・執筆要領等を参照ください。変更に際して会員の皆さまにはご迷惑をおかけいたしますが、諸般の事情をご理解いただき、ご協力いただきたくお願いいたします。

1. 申込期間：平成22年8月24日（火）14時～平成22年9月9日（木）14時
（電子申し込みによる）
 2. 投稿期限：平成22年9月22日（水）（必着・期日厳守）
 3. 提出先：（社）日本造園学会事務局「論文集委員会」
150-0041 東京都渋谷区神南1-20-11 造園会館6F
電話03-5459-0515 FAX03-5459-0516
 4. 大会の開催日・場所：平成23年5月下旬 東京農業大学予定
- 投稿及び電子申込に関する問い合わせは、
日本造園学会論文集委員会（幹事 入江.teruaki@nodai.ac.jp）までお願いいたします。

□ランドスケープ研究論文集に投稿される際のご注意（平成22年6月19日 改訂）

ランドスケープ研究論文集に論文を投稿される方は、投稿規定および執筆要領を熟読し、下記の事項に留意して投稿論文を作成して下さい。但し英文で投稿される方は、学会事務局まで投稿規定を請求して下さい。

（1）投稿資格について（規定1.「投稿資格」）

投稿者（筆頭著者）の方が未会員の場合は、学会への入会手続きを行ってください。（社）日本造園学会ホームページ（<http://www.landscapearchitecture.or.jp/>）からも手続きが行えます。

（2）重複投稿の禁止（規定2.「投稿条件」）

投稿規定に記されているとおり、投稿論文は未発表のものに限り、いわゆる他の学術雑誌等に投稿されたものを重複して投稿することは認められません。ただし、以下の要件にあてはまるものについては未発表扱いとします。

- ①日本造園学会支部大会で発表したもの
- ②研究会、国際会議、シンポジウムなどで梗概または資料として発表したもので審査を受けていないもの
- ③学位論文で、印刷・刊行する等の一般公表を行っていないもの
- ④行政、団体、公社公団、業界等からの委託研究・調査で、学術論文の体裁でなく成果報告書に掲載されたもの

なお、重複投稿等の疑義がある場合には、査読の段階において、別に定める基準によって判断するものとします。

（3）使用する言語（規定4.「使用する言語」）

投稿原稿の作成にあたって使用する言語については、日本語を原則としますが、留学生や海外在住の会員等、日本語による投稿が困難な場合にのみ英語による執筆も認めます。ただし、論文が受理され研究発表論文集に掲載された場合には、投稿者（筆頭著者）が研究発表会において口頭発表を行なうことが義務付けられますので、ご注意ください。

（4）投稿論文の頁数（要領2.「頁数」）

頁数は論文集の刷り上がりにおいて4頁を原則とします。ただし、2頁分の印刷実費を投稿者（筆頭著者）

が負担することを前提に、6頁も認めます。この頁数は投稿時に申請するものとし、校閲・修正段階での変更は認められません。また、論文集委員会の判断により、4頁から6頁に増頁することを認める場合があります。この場合も印刷実費は投稿者（筆頭著者）の負担となります。5頁は認められません。

（5）カラーの使用（要領3.「カラーの使用」）

図表等にカラーを用いて投稿された論文は、印刷時にもカラーを使用するものとします（カラー印刷料は投稿者（筆頭著者）負担）。印刷時にカラーを用いることを希望しない場合には、原稿（校閲用論文）もモノクロによるものとしてください。ただし、校閲・修正段階において、論文集委員会がカラーを用いることを勧告する場合があります（この場合もカラー印刷料は投稿者（筆頭著者）負担）。

（6）査読を希望する分野

投稿にあたって、校閲を希望する分野を、以下の8分野からひとつ選択し、登録票(電子申込は画面の指示に従う)に記入してください。

- ①造園学原論および造園史
- ②造園材料・施工および管理
- ③造園計画（庭園計画，公園計画，風景計画）
- ④都市および地方計画
- ⑤ランドスケープ・エコロジー
- ⑥情報処理・知覚
- ⑦論説
- ⑧事例・調査研究

※平成20年度より⑦論説論文，⑧事例・調査研究論文のカテゴリーが新設されました。これらを校閲希望分野として投稿する場合には、その新設の趣旨「景観法などの新たな施策に関わる議論や，市民運動・社会的実証実験に関する報告等では，産官学民の参加と意見交換が不可欠であり，そうした議論や活動に関する情報を蓄積し，それらに関する研究を積極的に促進することは日本造園学会の社会的責務と考えられます。（学会誌71(2)より）」、「論説は、総合的な視点に立った新たな計画論等についても研究業績として積極的に採用し（中略）、事例・調査研究は、造園・ランドスケープにかかわる最新かつすぐれた事例や調査が、研究業績としてすみやかに会員に共有されることが、本学会の発展に大きく寄与するとの認識にもとづき設定されたもの（学会誌72(5)より）」に十分留意ください。また、

⑦論説，⑧事例・調査研究は，ともに学術論文としての前提や論理展開のもと，結論や目的，対象，方法，結果等が客観的に明示された上で，⑦論説は「学術的な議論の対象として意義および独創性が認められる論説であること」，⑧事例・調査研究は「特色ある事例・調査で造園に関する新規，独自の知見，情報を含むこと」を基準として校閲を行います。（(9)査読に関わる基準もあわせてご覧下さい）

（7）投稿論文の受付

投稿された原稿は仮受付し，投稿規定，執筆要領に定められている事項に抵触していないかどうかの規定審査を行いません。論文集委員会ではその内容，程度によって，①受理通知を送付する，②疑問点等について投稿者（筆頭著者）に確認を行う，③訂正依頼を送付する，の3つの手続きのどれかをとります。

（8）論文の査読プロセス

論文集委員会は論文1編につき2名の校閲委員を選び，査読を依頼します。校閲委員による査読の結果は論文集委員会が取りまとめ，投稿者（筆頭著者）に通知します。採用が決定した場合は受理を通知します。不採用の場合には，校閲委員会の最終判断を経て不採用を通知します。要修正の場合には，修正期間を定め，投稿者（筆頭著者）に修正を通知します。定められた修正期間内に修正原稿が論文集委員会に到着しない場合には，不採用となります。

2名の校閲委員の査読では採否が決定し得ない場合には，第三校閲者を選び査読を行います。この場合は，査読に要する時間が長くなるため，投稿者（筆頭著者）への通知は通常よりも遅れることとなります。

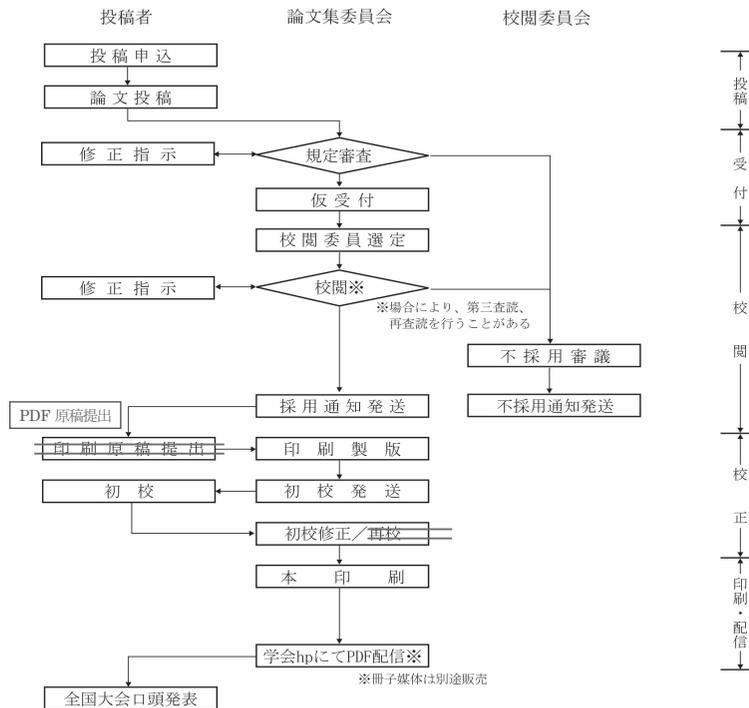
(9) 査読に関わる基準

論文の査読における判定基準は下記の項目によります。

- ・研究目的の設定の明確さ
- ・研究の意義，オリジナリティの有無
- ・研究対象，研究方法の適切さ
- ・分析と考察における論証の適切さ
- ・結論の有用性と発展性
- ・学術論文としての表現，形式の適切さ
- ・⑦論説では，上記判定基準の「分析と考察における論証の適切さ」を「考察における論理性」に，「学術論文としての表現，形式の適切さ」を「論説論文としての表現，形式の適切さ」にそれぞれ置き換えるものとします。
- ・⑧事例・調査研究では，上記判定基準の「分析と考察における論証の適切さ」を「事例・調査に関する記述および結論等の客観性」に，「学術論文としての表現，形式の適切さ」を「事例・調査論文としての表現，形式の適切さ」にそれぞれ置き換えるものとします。

(10) 査読・印刷の流れ

ランドスケープ研究論文集の発行は，ランドスケープ研究発行のプロセスに準拠しつつも，全国大会研究発表会にあわせた時間的制約のなかですすめられます。会員諸氏のご理解とご協力をお願いいたします。



研究発表論文集（ランドスケープ研究N0.5）発行の流れ

・なお，平成19年度よりポスターセッションによる発表も新たに導入されています。平成23年度全国大会の口頭発表の方法については，内容確定次第，学会HP等を通じて投稿者（筆頭著者）にお知らせします。

■ランドスケープ研究論文集投稿規定（平成19年7月1日一部補足，平成20年6月14日一部修正，平成22年6月19日一部修正）

日本造園学会全国大会研究発表会において発表しようとする者は，本規定により論文を投稿するものとする。

1. 投稿資格

投稿者（筆頭著者）は，本会正会員または準会員に限る。ただし，共著者についてはこの限りでない。

2. 投稿条件

投稿は学術的価値の高い内容をもった未発表の研究論文に限る。ただし，日本造園学会支部大会で発表されたものについてはこの限りでなく，投稿できるものとする。

3. 投稿申込手続

投稿者（筆頭著者）は学会ホームページ内の研究発表論文集応募申込ページより，画面の指示に従い申込期間内に応募手続きをする。同一投稿者（筆頭著者）からの投稿は1編を原則とする。

学会は上記電子申込を強く推奨するが，これが困難な場合は，

・①表題，②申込者氏名所属，連絡先，③著者全員の氏名所属，④和文摘要（300字以内），⑤校閲希望分野を記した書類（A4片面1枚）

・住所氏名を記入し160円切手を貼付けた返送用封筒（角2型，A4版）

の2点を申込期間内に学会に送付し応募手続きをする。

4. 使用する言語

投稿原稿の作成にあたって使用する言語については，日本語を原則とするが，留学生や海外在住の会員等，日本語による投稿が困難な場合にのみ英語による執筆も認める。

5. 原稿の執筆

原稿の執筆は，「ランドスケープ研究論文集執筆要領」に従うものとする。

6. 論文の掲載

掲載が受理された論文は，PDFにて会員に配信する（学会員はホームページ内よりダウンロードする）。なお，研究論文集の冊子は，会員予約販売：2,500円（送料込），それ以外：3,000円（送料別途500円）にて販売する。

7. 論文投稿料および論文掲載料

論文投稿時および掲載決定時に，投稿者（筆頭著者）は以下の費用を負担するものとする。

1) 論文投稿に際して（論文の採否にかかわらず，全ての投稿者が負担）

・論文投稿料20,000円

※論文仮受付後に送付する振込用紙を用いて所定の期日までに送金すること。期日までに論文投稿料が納入されない場合は，投稿者が論文を取り下げたものとみなされ，校閲は行なわれない。

2) 掲載決定に際して（掲載が決定した論文の投稿者が負担）

・掲載料（全員）：著者1名あたり9,000円。共同執筆の場合は，著者数分を掲載料とする（例：3名共著の場合の論文掲載料は，9,000円×3名＝27,000円）

・超過頁印刷料（6頁の場合）：掲載料に加え，増2頁分の印刷費として30,000円

・カラー印刷料（カラー頁を含む場合）：掲載料に加え1頁あたり80,000円

・別刷印刷代：別刷は100部単位で印刷できる。100部10,000円（頁数，カラー頁の有無を問わず）

※以上の費用について，採用通知書に記載された期日までに同封の郵便振替で送金し，原文提出時に控えのコピーを同封する。送金が確認されない限り最終原稿は受理されず，印刷の手続きに進まない

8. 原稿の送付および送付先

1) 投稿にあたり提出するものは以下のとおりとする。

①校閲用論文のコピー：6部

②登録票(電子申込専用HPに記入されたもの)のコピー：2部

- 2) 投稿者(筆頭著者)は、事故にそなえて原文をとっておくこと。
- 3) 校閲用論文は直接印刷用版下とするものではないが、執筆要領に示す形式に従い、刷上り体裁に準拠し、かつ校閲可能な質とすること。書式見本を学会ホームページよりダウンロードして使用することもできる。
- 4) 登録票は、電子申込をした場合は、申込時の「登録票入力確認」画面の印刷出力を「登録票」とする。電子申込でない場合は、申込後学会より送付される登録票用紙を用いる。
- 5) 論文受理通知が届いた後、PDF形式で作成した本原稿を定める期限内に提出すること。本原稿提出がないときは掲載しない。なおPDFファイルの作成マニュアル等を受理通知時にあわせて通知するので参照のこと。
- 6) 原稿の送付先は下記とする。

〒150-0041 東京都渋谷区神南1-20-11 造園会館6F

(社)日本造園学会事務局「論文集委員会」宛

9. 投稿者(筆頭著者)の校正

投稿者(筆頭著者)の校正は初校について行い、提出した最終原稿と印刷誌面の整合のチェックにとどめ、文章、図、表、写真の訂正および内容の変更は一切認めない。

10. 発表の義務

掲載が受理された論文は、投稿者(筆頭著者)が全国大会研究発表会において口頭発表またはポスター発表を行なうことが義務付けられる。

11. 著作権

- 1) 本学会が刊行する研究論文集に掲載された論文に関する著作権は著作者に帰属する。
- 2) 前項の著作権の運用については本学会が代行する。但し、著作者が自己の著作物を利用する場合は、この限りではない。

■ランドスケープ研究論文集執筆要領

1. 体裁

- 1) 原稿（校閲用論文）はワープロで作成し、A4用紙片面を用い本文・図・表・写真をレイアウトすること。本文は1行29字×58行×2段=3,364字、余白は上下23mm以上、左右15mm以上とする。
- 2) 1頁目は表題とAbstractのためのスペースとして25行（1段組み）を確保し、和文表題（1行目）、英文表題（3行目）、Abstract（11行目以降）、Keywords（23行目）、キーワード（24行目）を記入すること。氏名は記載しないこと。26行目から2段組みとし本文を開始すること。
- 3) 1頁目最下2行は所属欄として空白とすること。（所属は記入しないこと）
- 4) 活字は、等幅の明朝体を用い9ポイント程度とする。和文のプロポーショナルフォントは使用しないこと（例 MS明朝:可, MS P明朝:不可）。英文表題, Abstract, KeywordsはTimes New Roman（またはそれに相当するフォント）を用い9ポイント程度とする。Keywordsはイタリック体を用い、固有名詞等以外はすべて小文字とする。補注及び文献のフォントは本文より下げてもよいが、7ポイント以上を用いるものとする。
- 5) 本文の左端に行番号を5行単位で（ページ毎）つけること。また各頁右下余白にページ番号をつけること。
- 6) 1頁目の上部余白部の左隅に「電子申込受付番号」、右隅に「論文番号」記入欄(投稿時は記入不要)を設けること。
- 7) 以上の体裁に従って作成された書式の見本（MS-WordおよびPDFによる）が、学会ホームページに掲載されているので適宜利用されたい。

2. 頁数

- 1) 刷上り頁数は原則として4頁とする。ただし、2頁分の印刷実費を投稿者（筆頭著者）が負担することを前提に6頁も認める。
- 2) 頁数は投稿時に頁数を申請するものとし、校閲・修正段階での変更は認めない。ただし、論文集委員会の判断により、4頁から6頁に増頁することを認める場合がある。この場合も印刷実費は投稿者（筆頭著者）の負担となる。
- 3) 5頁は認めない。

3. カラーの使用

- 1) 図表等にカラーを用いて投稿された論文は、印刷時にもカラーを使用するものとする。カラー印刷料は投稿者（筆頭著者）が負担する。印刷時にカラーを用いることを希望しない場合には、原稿（校閲用論文）もモノクロによるものとする。
- 2) 校閲段階において、論文集委員会がカラーを用いることを勧告する場合がある。この場合もカラー印刷料は投稿者（筆頭著者）が負担する。

4. 表題

- 1) 論文の表題は内容を的確に表すものとし、40字以内とする。
- 2) 副題、継続番号（その1、など）は認めない。
- 3) 英文タイトルも表記すること。

5. AbstractとKeywords

- 1) Abstractは、本文とは独立して投稿論文の概要が理解されるもので、目的、方法、結果、結論などを端的かつ具体的に示し、英文200語程度で表現すること。パラグラフ分けはしないこと。
- 2) Abstractに続いてKeywords（英語）を3～6個記すこと。さらにこれに対応するキーワード（日本語）も記すこと。論文の内容を端的に表し、かつ客観性の高いことばの選択に留意すること。
- 3) AbstractとKeywordsはともに、ネイティブチェックを受けることが望ましい。

6. 本文

本文の見出しはなるべく：1. XXX (行がえ), (1) YYY (行がえ), () ZZZ (行がえ) として統一すること。なお大見出し (1. を除く 2. 3. ・ ・ ・以降) の前は1行空白行とすること。

7. 謝辞

謝辞は投稿時には記入せずスペースのみ確保し、本原稿 (審査後の最終原稿) にのみ記載すること。

8. 補注・文献

1) 補注および引用文献は, 1), 2)~n)の記号で, 本文該当箇所右側(上付き)に明示し, 本文の末尾に引用順あるいはアルファベット順で一括掲載すること。

2) 文献 (引用・参考) は本文にかかわりのあるものにとどめ, 下記に従って記載すること。

①論文, 著書: 著者名 (公刊西暦年): 表題 (または書名): 掲載雑誌 巻 (号), 頁
※単行本の場合は発行所名を記入すること。

例: 造園太郎 (1998): 造園樹木の分布に関する研究: ランドスケープ研究62(3), 120-123

園芸花子 (1995): 花卉入門: ランドスケープ出版社, 250pp

②インターネット上の情報: URL, 最新更新日, 参照時の年月日を明記する。

(ア)例: 森林次郎: 緑化の技法: ○○ホームページ<<http://abc.def.or.jp>>, 2001.4.30更新, 2002.10.20参照

3) 校閲の公正を保持するため, 文献の著者名を「拙著」「拙稿」とは書かないこと。本論中においても「筆者らは既に……の研究を実施し」などとはせず, 「**の研究では…」などと客観的に記述すること。

4) 文献欄も本文と同じく2段組とする。

9. 図・表・写真

1) 図・表・写真のレイアウトに際しては, 内容が十分読みとれるよう大きさや解像度に留意すること。

2) 表題にはそれぞれ通し番号をつけ, 図, 写真は下側に, 表は上側に各々図表番号と表題を明記すること。

3) レイアウトは刷上り時に第1頁目が奇数頁 (見開き右頁) になることも考慮すること。

10. 登録票

登録票は, 電子申込をした場合は, 申込サイトの「登録票入力確認」画面の印刷出力を「登録票」とする。なお, 「登録票入力確認」画面の印刷出力を忘れた場合には, 「登録票」に記入した内容を別途記入したものを提出すること。

11. 本原稿 (審査後の最終原稿)

1) 本原稿 (審査後の最終原稿) は, 完成した図表を配置した完全版下原稿のPDF形式で作成したものを提出すること。本原稿の作成にあたっては下記事項を必ず記載すること。なお提出にあたっては, 最終原稿作成要領, 最終原稿見本およびPDFファイル作成マニュアルなどを通知する。

2) 和文著者名, 英文著者名, 和文所属を記載すること。

3) 著者所属は, 大学・学部・学科のように3項目以内で記載すること。著者が複数で所属機関が異なるときは, 第1著者に「*」, 第2著者に「**」 (以下, 同様) の記号を付け区別すること。

4) 1頁目の上部余白部の「論文番号」記入欄, 本文の左端の行番号, 各頁右下余白のページ番号は削除すること。

5) 謝辞を加える場合には, 本文と補注・文献の間に記入すること。

Call for papers for the Journal of JILA Volume 74(5)

This is a call for English papers for Volume 74(5) of the Journal of the Japanese Institute of Landscape Architecture (JILA). Volume 74(5) aims to publish original, high-quality papers which must be presented at the JILA Annual Scientific Research Meeting held in May, 2011, at Tokyo University of Agriculture. Presentations must be made either in English or Japanese. Papers accepted for publication in the Journal of the JILA – Landscape Research Papers for Publication must be presented in oral and/or poster forms at the research presentation of the JILA Annual Scientific Research Meeting.

Please note that the first author must be a member of the JILA, and that author may be named first for only one paper.

Submission of Manuscripts

JILA members who wish to submit a manuscript must first register their submission on the JILA web site (<http://www.landscapearchitecture.or.jp/>). Online registration must be completed by no later than September 9 14:00, 2010. Manuscripts must reach the editorial board no later than September 22, 2010.

For further information please contact;

Teruaki Irie

Volume 74(5) Editorial Board Secretary

Email: teruaki@nodai.ac.jp

Or

Volume 74(5) Editorial Board

Japanese Institute of Landscape Architecture

6th floor, Zoen Kaikan

1-20-11 Jinnan, Shibuya-ku, Tokyo, 150-0041, Japan.

平成22年度 第34回造園夏期大学 開催要領

主催 (一般財)日本造園修景協会 協賛 (社)日本公園緑地協会
後援 国土交通省 (社)日本造園建設業協会
(社)日本造園学会 (社)ランドスケープコンサルタンツ協会

1. 日程 平成22年8月25日(水)～27日(金)
2. 会場 東京セミナー学院(東京都豊島区西池袋)
3. テーマ 造園修景と生物多様性
4. 講義内容

日時	10:50	11:00～12:00	12:50～14:20	14:30～16:00
8/25 (水)	開講挨拶 (一般財)日本造園修景協会技術・事業委員長 樋渡達也	第1講義 緑に関わる 国土交通省の施策 国土交通省 公園緑地・景観課 課長 小林 昭	第2講義 造園修景技術の新しい思潮 (生物多様性を踏まえた造園 修景技術) 今後の方向性を考える上では、第三の公園や緑地、或は庭園の果たす役割が登場したと考えられる。これまで利活用の側面のみ、造園修景空間に求められてきたが、いわゆる存在効用の機能が生物多様性の論点から改めて浮き彫りにされてくるだろう。 東京都立大学環境情報学部 教授 涌井 史郎	第3講義 里山パークマネジメント (里山の管理技術と生物多様性) 都内最大の都立公園である野山北・六道山公園において、里山環境を守り育むための新たなマネジメントシステムを開発。都民協働の推進により、生物多様性の向上について大きな成果をあげている。 西武・狭山丘陵パートナーズ 都民協同部長 佐藤 留美 平成21年度都立公園コンクール 国土交通大臣賞受賞
8/26 (木)	第4講義 企業緑地と生物多様性 (地域のみどりとつなげる取組みへの挑戦) 企業が社会的責任として生物多様性に取り組み中、土地利用のあり方を見直す動きが出てきている。敷地内で完結する緑地ではなく、地域の生態系ネットワークを調べた上で、そのつながりの強化に貢献しようとするものである。 先進事例を紹介する。 (株)インターリスク総研 コンサルティング第一部 主任研究員 原口 真	第5講義 地域の自然や景観に配慮した 集合住宅「深大寺レジデンス」 (アドレスは武蔵野・深大寺) 地域や時間をよんだ緑の環境を提供することで、地域とつながる環境を創出している。公開歩道や屋上庭園は、地域の人や居住者が自然に親しめるよう工夫されている。 (株)長谷工コーポレーション ランドスケープエグゼクティブプランナー 東京農業大学非常勤講師 山本 富雄 第8回屋上壁面特殊緑化コンクール 環境大臣賞受賞、第28回緑の都市賞 国土交通大臣賞受賞、公共の色彩賞・環境色彩10選受賞	第6講義 東京臨海広域防災公園の整備等 (1)基幹的広域防災拠点 わが国の政治・経済の中心であり人口や諸機能が高度に集積する首都圏、ひとたび大規模地震が発生すると首都圏の大災害に備えて「基幹的広域防災拠点」として国土交通省・東京都の連携のもと整備を進めている東京臨海広域防災公園。 国営昭和記念公園事務所 副所長 松本 浩 (2)東京都における防災公園の管理運営について その管理運営の実例 (公財)東京都公園協会 公園事業部 事業企画課長 佐藤敏之	
日時	10:00～12:30	12:30～		
(金)	現地見学 東京臨海広域防災公園 (この夏、防災体験学習施設「そなエリア東京」がオープンする) 西武造園(株)・(株)NHKアート共同体 国営東京臨海広域防災公園管理センター長 保條 光年	東京臨海広域防災公園 	午後は周辺施設等自由見学	

注. 講義内容は都合によって変更することがあります。

5. 募集人員 80名
6. 参加費 修景協会会員・造園学会会員 23,000円
非会員 27,000円
※参加費には宿泊費は含まれておりません。
7. 振込先 郵便振込 00150-9-41915
銀行振込 りそな銀行赤坂支店 普通預金 0353472
口座名はいずれも (財)日本造園修景協会
8. 申し込み 日本造園修景協会のホームページから参加申込書をプリントアウトし必要事項を記入し、参加費を支払い手続きのうえ、参加証を送付するための送付先を記入した封筒を同封し(一般財)日本造園修景協会に郵送下さい。
9. 締切日 7月30日(金)
10. この研修は造園 CPD 制度の認定プログラム(11単位)です。

※研修会場案内、現地見学集合時間等詳細は参加者にご案内致します。

平成22年度日本造園学会北海道支部大会案内

標記の大会を下記のとおり開催いたします。ご参加、お待ち申し上げます。

(社)日本造園学会北海道支部

■日時・場所 2010年9月4日(土)～5日(日)
かでの2・7(札幌市中央区北2条西7丁目)ほか

■テーマ「北海道の緑と生物多様性」

■スケジュール

9月4日(土) かでの2・7 9時15分受付開始

09:30～11:30 研究・事例報告会

11:40～12:30 ポスターセッション・学生セッション

13:30～13:50 北海道支部総会

14:00～17:45 環境省北海道地方環境事務所共催

フォーラム「北海道の緑と生物多様性」

基調講演とパネルディスカッションを予定しています。

18:00～20:00 交流会

9月5日(日) エクスカーション・東北支部交流会(時間・場所検討中)

※詳細は決まり次第、北海道支部ホームページ「北の造園広場」でお知らせします。

<http://www.jila-hokkaido.com/>

■参加費

資料代として一般2,000円(学生1,000円)、懇親会5,000円(学生2,000円)

■「研究・事例報告会」「ポスターセッション」「学生セッション」の発表申込方法

7月30日(金)までに電子メールapply@jila-hokkaido.comまたはファックス011-706-2452に、氏名、所属タイトル、口頭発表・ポスター発表・学生セッションを、件名「研究・事例報告会申込」「ポスターセッション申込」「学生セッション申込」としてお知らせください。学生セッションの詳しい募集要項と申込用紙は支部ホームページまたは上記アドレスに請求してください。

■「交流会」の申込方法

電子メールshibu@jila-hokkaido.comまたはファックス011-706-2452に、氏名・所属・人数・連絡先を明記して、件名「交流会申込」として申し込み下さい。

平成22年度日本造園学会東北支部大会案内

大会テーマ「東北のランドスケープ遺産を考える」

平成22年度日本造園学会全国大会分科会「ランドスケープ遺産インベスTREEづくりの方向を考える」において、全国に所在するランドスケープ遺産の把握と公表に努めることが確認された。東北支部における取り組みはこれからであり、本大会を機に、ランドスケープ遺産の社会的な評価やまちづくりへの活用等について考えていきたい。

日時：平成22年10月23日（土）～24日（日）

場所：宮城大学太白キャンパス

■10月23日（土）宮城大学太白キャンパス

12：00 受付

12：30～13：00 幹事会

13：00～13：30 総会

13：30～16：30 シンポジウム（公開）

- ・基調講演：東京農業大学地域環境科学部造園科学科
粟野 隆

- ・パネルディスカッション：

各県からの代表会員コメンテーター（各県推薦）

- ・コーディネーター：東北公益文科大学 温井 亨

16：30～17：30 ポスターセッション（公開）

18：30～20：30 交流会（ホテル白萩）

- ・ホテル白萩の無料バス送迎可
- ・4,500円／人（学生2,000円）

■10月24日（日）エクスカーション：登米市

- ・バス借上げ料の一部個人負担

9：00 仙台市役所前集合

9：10 発 移動：バス

- ・伊豆沼（ラムサール条約指定登録湿地）、みやぎの明治村（歴史的建造物群等）、北上川流域の文化的景観（船下り2時間程度×2グループ）
- ・昼食：みやぎの明治村教育資料館（明治中期の小学校）で昭和30年代給食予定

17：00 JR仙台駅着

■問い合わせ先

〒990—9530 山形県山形市上桜田3—4—5

東北芸術工科大学建築・環境デザイン学科 渡辺 桂

TEL. 023—627—2072 FAX. 022—627—2252

E-mail watanabe.katsura@aga.tuad.ac.jp

平成22年度日本造園学会関東支部大会案内

■開催月日：平成22年11月6日（土）、7日（日）

■場所：神奈川県大磯町（11月6日）

日本大学湘南キャンパス（11月7日）

■日程：

11月6日（土） 公開現場研究会「ランドスケープ遺産を誰が継承するのか—わたしたちの役割を考える
行政・所有者・市民・学会それぞれの立場で—」

11月7日（日） 事例・研究発表会、ポスター展示、学生デザインワークショップ「サマースタジオ2010
千年のランドスケープ」、卒業制作展示会、交流会

■大会参加費（予定）：参加費

会員（賛助会員含む）	3,000円
会員外	4,000円
学生	1,500円
交流会費 一般（学生以外）	4,000円
学生	2,000円

■事例・研究報告の申し込み：

事例・研究報告の申し込みをすでに開始しております。発表を希望される方は、2010年8月31日までにe-mail、FAXまたは郵送のいずれかで、関東支部事務局までお申し込みください。申込書の書式は特にありませんが、お申し込みの際に以下をお知らせください。

- ①発表者名、所属（学生は学年も）
- ②発表題目（要旨提出時に変更することも可能です。）
- ③発表形式（口頭発表またはポスター発表）
- ④連絡先
 - ・所属先か自宅か ・郵便番号 ・住所（所属先の場合は部署[研究室]名まで）
 - ・宛名 ・電話番号 ・FAX番号 ・e-mailアドレス

なお、お申し込みいただいた方には、後日、以下についてお願いいたします。

- ・要旨の作成（口頭発表：A4サイズ2ページ 4,000字程度、ポスター発表：300字程度）
- ・学会広報等の原稿の作成
- ・発表登録料の振り込み（1件につき3,000円の予定）

詳細については決まり次第、造園学会関東支部のホームページ（<http://nodaiweb.university.jp/nkbjila/>）に掲載します。

問い合わせ先

千葉県松戸市松戸648（郵便番号271-8510）
千葉大学園芸学部 緑地環境学科内
日本造園学会関東支部事務局（担当：高橋輝昌）
TEL 047-308-8890 FAX 047-308-8893
e-mail kanto.jila@gmail.com

平成22年度日本造園学会中部支部大会 開催案内

標記大会を下記の要領で開催いたします。会員各位のご参加をお待ち申し上げます。

(社)日本造園学会中部支部

■開催日 平成22年10月30日(土)～31日(日)

■場所 長岡造形大学(〒940-2088 新潟県長岡市千秋4-197)

■日程

〈第1日目 10月30日(土)〉

見学会(山古志[長岡市]の中越大地震被災地) ……13:00～17:00

(集合13:00 長岡造形大学駐車場, 全員マイクロバスに乗り換えて見学します)

交流会(会場:未定) ……18:00～20:00

〈第2日目 10月31日(日)〉(会場:長岡造形大学)

研究発表・事例報告(口頭発表・ポスター発表) ……9:00～12:00

幹事会 ……12:20～13:00

支部総会 ……13:00～13:30

公開シンポジウム ……13:30～16:00

「山古志の復興と景観」

基調講演 平井邦彦(長岡造形大学名誉教授、(財)山の暮らし再生機構理事長)

パネラー 青木 勝(元長岡市山古志支所長)

鈴木重一(中越みどり復興アクション代表)

上野祐治(長岡造形大学)

*本支部大会から、学生の研究発表・事例報告のうち、優秀なものに対して当支部から表彰を行う予定をしておりますので、学生諸君は奮って発表・報告して下さい。

*この大会は造園CPD制度認定プログラムです。CPDカードをお持ちの方は持参して来て下さい。

■参加費 大会参加費(10月31日の資料代):3,000円(学生1,000円)

※ 公開シンポジウムは参加無料

見学会参加費:3,000円(学生は1,000円)

交流会費:6,000円(学生は1,000円)

■参加申し込み

〈研究発表・事例報告の申込み〉

下記の①～⑤の項目を明記の上、申込み先へEメールまたはFAXでお申込みください。

申込み締め切り:9月1日(水)17:00

記載事項:①発表タイトル(原稿提出時に変更可)

②発表者名・所属(連名の場合は、発表者の名前の先に○を付けてください)

③発表形態(口頭またはポスター)

④発表内容の要旨(300字以内)

⑤連絡先(住所・電話・Eメール・FAX)

※発表には、発表者または筆頭者が造園学会会員であることが必要です。

口頭発表は発表10分+質疑応答5分(計15分)です。

申込み状況や発表内容によっては、発表形態の変更をお願いする場合があります。

※研究発表原稿の様式等の詳細は「発表要旨作成要領」(www.jilac.jp/index)に従って作成し(A4判2頁),

9月24日（金）17：00必着で、下記の申し込み先へEメールでお送りください。

※ポスター発表は、A1（594mm×841mm）・2枚までとします。当日10月31日（日）9：00にポスター（パネルまたは紙）をご持参ください。

〈見学会・交流会の申込み〉

下記の①～⑤の項目を明記の上、申し込み先へEメールまたはFAXでお申込みください。

申し込み締め切り：10月1日（金）17：00

記載事項：①見学会（参加・不参加）（参加の場合は観光バス利用・乗用車使用を明記してください。）

②交流会（参加・不参加）

③参加者名

④所属

⑤連絡先電話番号（携帯番号もお知らせください。）

⑥Eメールアドレス

■長岡造形大学へのアクセス（<http://www.nagaoka-id.ac.jp>を御参照ください。）

〔JR長岡駅（大手口7番線）から〕越後交通バス「江陽（こうよう）団地」行き。約20分、長岡造形大前下車すぐ。



■申込み・問合せ先

平成22年度日本造園学会中部支部大会 運営事務局

E-mail :hida@nagaoka-id.ac.jp（件名に必ず「造園中部」の文字を入れて下さい。）

電話：0258-21-3521

FAX：0258-21-3522

住所：〒940-2088 新潟県長岡市千秋4-197 長岡造形大学建築・環境デザイン学科

担当：飛田 範夫（ひだ のりお）（問い合わせは可能な限りEメールをお願いします。）

平成22年度日本造園学会関西支部大会（鳥取）案内

(社)日本造園学会関西支部

標記の大会を下記のとおり開催いたします。多数のご参加をお待ちしております。
関西地区以外の方々もご参加ください。

■開催月日：平成22年12月4日（土）～12月5日（日）

■開催場所：発表・総会・幹事会（12/4）鳥取環境大学 鳥取市若葉台北1-1-1
シンポジウム（12/5） 鳥取大学工学部 鳥取市湖山町4-101

■日 程

□第一日目 平成22年12月4日（土）

研究・事例発表セッション（口頭発表）

ポスター発表、営業展示

総会、幹事会

ランドスケープ遺産研究会、関西支部賞発表及び表彰式

交流会（賀露港）

□第二日目 平成22年12月5日（日）

見学会

シンポジウム「山陰海岸ジオパークとランドスケープ（仮）」

■参加費用 大会参加費 一般：3,000円 学生：1,000円
交流会費 一般：5,000円程度 学生：2,000円程度

■見学会・交流会の申し込み、問い合わせ先

見学会・交流会の区別、参加者名、所属、連絡先電話番号、FAX、メールアドレスを記して、メールまたはFAXで次のところへお送りください。

締め切り 平成22年11月19日（金）

メール：nak-fumi@kankyo-u.ac.jp、FAX&TEL：0857-38-6771

〒689-1111 鳥取市若葉台北1-1-1 鳥取環境大学 建築・環境デザイン学科内

中橋 文夫

■研究・事例発表の申し込み、問い合わせ先

<研究・事例発表の申込>：以下の1)～6)の項目を明記の上、11月5日（金）までに、下記の支部事務局あてに、メールまたはFAXで申し込んでください。（できる限りメールにてお願いします。）

- 1) 著者名、所属（発表者の名前の先頭に○をつけておいてください）
- 2) 希望する発表形態（口頭またはポスター）
- 3) 発表タイトル
- 4) 発表内容のキーワード（3～5つ）
- 5) 発表内容の要旨（300字以内）
- 6) 連絡先（メール、ファックスおよび電話）

- ・口頭発表およびポスター発表の発表時間配分は、申込件数に応じて調整します。
- ・申込状況や発表内容によっては、発表形態の変更をお願いする場合があります。

- ・口頭発表を申し込まれた方には、11月12日（金）必着で、発表要旨集の原稿A4・2頁の提出をお願いします。
- ・ポスター発表を申し込まれた方は、当日（12月5日（日））、会場へ直接ポスター（パネルまたは紙）をお持ち下さい。なお、ポスター1件の割り当てスペースは、幅90cm・高140cm程度を予定しています。
- ・口頭発表については、3～5報のセッション制でディスカッション時間を設けます。
- ・ポスター発表では、指定された時間（コアタイム）にポスターの前でのプレゼンテーション、質疑応答をお願いします。
- ・申込時の内容を大会報告等としてデータ提供する予定です。

〒606—8502 京都市左京区北白川追分町

京都大学大学院農学研究科環境デザイン学研究室内

(社)日本造園学会関西支部事務局（担当：今西純一）

メール：imanishi@kais.kyoto-u.ac.jp、TEL：075—753—6099、FAX：075—753—6082

ホームページ：http://www.landscape.kais.kyoto-u.ac.jp/jila_w/annai.html

平成22年度日本造園学会九州支部大会案内

標記の大会を下記のとおり開催いたします。会員各位の研究・事例報告及び大会への参加をお待ちしております。

- 開催月日 平成22年11月27日（土）～28日（日）
- 開催場所 崇城大学（情報学部棟F号館）（住所：〒860-0082 熊本市池田4-22-1）
- 大会テーマ 「都市の品格と造園まちづくり」
九州支部大会統一テーマ「かなたの自然と身近な共生景観」

■日 程

- <第1日目> 11月27日（土）（内容時間は予定）
- | | |
|------------|-------------|
| 研究・事例報告（1） | 9：00～12：00 |
| 昼食（幹事会を含む） | 12：00～13：00 |
| 支部総会 | 13：00～13：30 |
| 研究・事例報告（2） | 13：30～14：45 |
| 基調講演 | 15：00～18：00 |
| 交流会 | 18：00～20：00 |
- （交流会時に、優れた研究・事例報告を表彰します。）

- <第2日目> 11月28日（日）
テクニカルツアー（詳細未定）

- 最新情報 支部大会の最新情報は、下記のWEBサイトをご覧ください。
<http://www.qzouen.jp/>

■研究・事例報告の申込み

研究・事例報告会で発表（口頭もしくはポスター）を希望される方は9月1日（水）までに、電子メール、または郵送・FAXのいずれかにより下記、支部事務局までお申し込みください。申し込みの際は、①発表者名（所属）、②発表題目（原稿提出時に変更可）、③発表形態、④連絡先（住所、電話、e-mail、FAX）をお知らせください。

研究・事例報告集の原稿は、申し込み後、送られてくる投稿・執筆要領にしたがって作成し、〔A4判2ページ（4000字程度）〕、10月9日（金）必着で、投稿・執筆要領が指定するあて先に送付してください。掲載料は、1報告につき3,000円です。

- 問合せ・申込み 日本造園学会九州支部事務局（担当：朝廣和夫）
〒815-8540 福岡県福岡市南区塩原4-9-1
九州大学 芸術工学研究院 環境・遺産デザイン部門 内
TEL/FAX 092-553-4480 E-mail qzouen@design.kyushu-u.ac.jp

口頭発表

1. 都市公園における刈取りによるスズラン個体群の回復

内藤哲也（北海道大学大学院農学研究院）

成田瑞樹（北海道大学大学院農学院）

中村まい（北海道大学農学部）

笠康三郎（有限会社緑花計画）

野生状態のスズランが保全されていた札幌市の地区公園において、減少してしまったスズラン個体群を回復させるための刈取り管理方法を提案することを目的とし、競合植物の刈取りによりスズラン個体群および群落内の植物がどのような影響を受けるのかを明らかにした。スズランの個体数および開花個体率は刈取り開始後4年間に増加した。とくに、春・夏・秋・初冬の4回の刈取りが有効であった。初冬刈りのみでも十分な効果が認められた。実験開始時にスズランに次いで植物体量の大きかったスキ、オオヨモギの植物体量は夏と秋の刈取りで減少したが、カモガヤの植物体量は増加した。

2. 自生種を用いて形成された景観に対する印象と意識の及ぼす情報提供の影響

松島肇（北海道大学大学院農学研究院）

佐藤あき（北海道大学農学部）

内藤哲也（北海道大学大学院農学研究院）

本研究では、自生種に関する情報提供が景観の印象や緑地整備の考え方にどのように影響するかを明らかにすることを目的とし、自生種や園芸種を導入した緑地景観に対する写真を用いた印象評価実験を行い、情報提供の有無による景観の印象や景観形成に対する意識への影響について明らかにした。写真を用いた印象評価実験と緑地整備の考え方に関するアンケートから、自生種を使用することの意義に関する情報提供は、景観の印象を向上させるまでにはいたらなかったが、自生種群落をより貴重であると感じ、特に自然地の景観形成において自生種を導入する意義を認識させることができることが明らかとなった。

3. 札幌市木の花団地の建替に伴う既存樹木活用とグリーンバンクの取組みに対する居住者意識

小木曾裕（㈱URリンケージ／日本大学非常勤）

内藤隆悟（㈱ドーコン環境事業本部環境保全部）
木の花団地建替に伴う既存樹木活用とグリーンバンクの取組みの居住者意識を解析し、団地の緑の評価と質的な整備の視点を明らかにすることを目的とした。その結果、約9割の人が建替後の緑を高く評価し、「桜並木・緑の豊かさ」、「全体としての環境」、「シンボル、街並みの骨格の形成」としての評価をして、団地周辺や従前居住地よりも、団地の緑量を多く感じていることがわかった。グリーンバンクの認知は、事業者手から様々な手段での周知が認知の度合いを高めることがわかり、グリーンバンクの取組み及び伐採樹木の再利用、継続の意向の評価は9割の高い評価があり、グリーンバンク手法は居住者のニーズに合致していることがわかった。

4. 潜在クラスモデルによる都市近郊林利用者の混雑感の分析

愛甲哲也（北海道大学大学院農学研究院）

庄子康（北海道大学大学院農学研究院）

三重野太郎

(University of Illinois, Urbana-Champaign)

Arne Arnberger (University of Natural Resources and Applied Life Sciences Vienna)

Renate Eder (University of Natural Resources and Applied Life Sciences Vienna)

都市近郊林は身近なレクリエーションの対象地として注目されている一方で、混雑感の増加、異なる利用者間の対立などから、正確な利用状況の把握と、多様化する利用者への対応が求められている。本研究では、札幌市近郊の野幌森林公園と、オーストリア・ウィーン市近郊のドナウアウエン国立公園ロバウ森林の利用者を対象に、選択型実験による混雑感評価を実施し、潜在クラスモデルによる分析を行った。結果として、歩行者数、自転車数、山菜採り、犬連れ利用者の存在により好ましさが低下することが示された。潜在クラスモデルにより、選好の異なる回答者を区分し、利用者数だけでなく、好ましくない利用状況を具体的に提示することができた。

5. 日本とロシアの自然風景を対象とした風景観の日露比較

海老根聡司（北海道大学農学部）

松島肇（北海道大学大学院農学研究院）

Elena PETROVA (State University of Moscow,
faculty of Geography)

高山範理 (森林総合研究所)

Yury MIRONOV (Vemadsky State Geological
Museum of Russian Academy of Science)

中島敏博 (千葉大学大学院)

古谷勝則 (千葉大学大学院)

上田裕文 (札幌市立大学デザイン学部)

平岡直樹 (南九州大学)

本研究は自然風景に対する日本人とロシア人の風景観の比較を行い、その特徴と差異を明らかにすることを目的とした。分類実験の結果から得られたグループの構成に日本人とロシア人の間で大きな差異は見られなかったが、いくつかの写真において認識の差異が明らかになった。分類の傾向として、日本人は水の有無に強く影響されて写真を分類したが、ロシア人は山を注視する傾向がみられた。好まれる写真に関しては日本人とロシア人の間での共通の認識が見られたが、好まれない写真に対してはその共通性は低かった。また、日本人は「湿原と川」の写真に対して異国情緒があると感じ、ロシア人は「山と湖」の写真に対して異国情緒があると感じていた。

6. 風景イメージスケッチ手法を用いた森林イメージの日晒比較

上田裕文 (札幌市立大学デザイン学部)

中島敏博 (千葉大学大学院)

高山範理 (森林総合研究所)

Elena PETROVA (State University of Moscow,
faculty of Geography)

松島肇 (北海道大学大学院農学研究院)

古谷勝則 (千葉大学大学院)

青木陽二

北海道大学とイルクーツク大学の学生を対象に、各自が思い描く森林イメージを調査し比較した。風景イメージスケッチ手法を用い、回答者の概念的な理解や体験を通しての森林への関わり方が明らかになった。その結果、北海道大学の学生は近景として広葉樹林を余暇空間として描くことが多かった。一方でイルクーツク大学の学生は、俯瞰景として針広混交林を審美的な眺望として描く傾向があった。

7. 札幌市における狭小街区公園の時間的・空間的特徴に関する研究

椎野亜紀夫 (北海道工業大学空間創造学部)

本研究は札幌市を対象として狭小街区公園の時間的・空間的特徴の解明を目的に研究を行った。空間条件等を変数とした主成分分析、クラスター分析を行った結果、狭小街区公園はタイプⅠ「児童公園型」、タイプⅡ「最小型」、タイプⅢ「移行前期型」、タイプⅣ「移行後期型」、タイプⅤ「面積担保型」の5タイプに分けられ、各タイプの設置時期により面積規模や施設配置には差異が見られた。また狭小街区公園の設置時期は「遊具設置優先期」、「小規模・集約設置期」、「改善期」の3期に分けられると考えられた。

8. パッシブ型赤外線カウンターと自動撮影カメラによる都市近郊林利用者数の計測

谷彩音 (北海道大学大学院農学院)

愛甲哲也 (北海道大学大学院農学研究院)

阿部怜奈 (北海道大学大学院農学院)

貝瀬真緒 (北海道大学大学院農学院)

山口和男 (有自然環境コンサルタント)

レクリエーションの場としての森林を適正に管理する上で、利用者数の情報は有用である。本研究では、都市近郊林においてパッシブ型赤外線カウンターおよび自動カメラによる利用者数の計測を行い、精度の面からその有効性について検討することを目的とした。結果から、パッシブ型の赤外線カウンターおよび自動カメラは、実測値との相関が比較的高いことが明らかになった。値を適切に補正することで、正確な利用者数の把握が可能であることが示された。

9. 札幌市における狭小公園の整備計画に関する研究

北垣友里

(室蘭工業大学大学院工学研究科建築社会基盤系専攻)

黒澤佑介 (札幌市北区土木部維持管理課公園緑化係)

市村恒士

(室蘭工業大学大学院工学研究科くらし環境系領域)

本研究では、300㎡以下の都市公園（以下、狭小公園）の整備計画の検討を行った。具体的な方法としては、調査対象都市である札幌市が行っている狭小公園整備等の状況を考慮した整備計画案を作成し、その案に関して住民にアンケート調査を実施し

た。その結果、現在の整備費で整備を行う場合は、「遊び」に特化した幼児用遊具主体の整備が望ましいこと、整備費を削減し整備年数を早めた「簡易型の整備」についても期待されていること、簡易型の整備の場合、一つの機能に特化した整備よりも「休憩」「遊び」といった活動ができる多様な整備が望まれていること等が把握された。

10.『緑地福祉』の必要性とその展開に関する研究～北海道Y町の新たな『花と緑』のまちづくりを目指して～

及川修司（北海道余市養護学校）

地域の諸課題を包括的に改善・解決する視点から、「緑地福祉」という「広範囲な緑に関わる活動全般を通して、誰もが幸福を獲得していくための概念」をテーマとして取り上げ、その意義を見出すべく、関連用語との比較検証を行った。加えて、北海道Y町で、その概念の具現化を図るために、「緑地福祉」の活動実態やニーズ、課題について、住民や関係機関（医療・福祉・教育）を対象にアンケート調査をした。最後に、調査結果や先行事例を参考に、大きく2つの方向性を当該行政機構に提案した。1つは「Yガーデン」を「緑地福祉」の総合的拠点にする施策、2つめは、身近な「公園」「森林」を「緑地福祉」に焦点化したものへ改善・整備する施策である。

11.産炭地域へのバスツアーおよびイベント参加者の炭鉱受産や産炭地に対する意識

小林昭裕（専修大学北海道短期大学）

本調査では、負のイメージの強い炭鉱遺産に、観光目的で訪れる来訪者が、炭鉱遺産や産炭地にどのような意識を抱くのかを明らかにするため、炭鉱遺産を目的に産炭地を訪れる利用者を対象に意識調査を実施した。炭鉱遺産ツアーへの参加の動機は、産炭地・廃墟・産業遺産への関心、故郷・生活した場所への再訪が主であった。産炭地に対しての印象・感動したことは、寂れた様子、急速な荒廃といったマイナスのイメージだけでなく、巨大構造物・技術の凄さやボランティアガイドの話・熱心さへの感動など多様であった。炭鉱遺産について説明前後の印象では、説明後にプラスイメージが現れ、印象の転換が確認された。

12.登別市ネイチャーセンター「ふおれすと鉱山」における人材育成に関する研究

古瀬史人

（室蘭工業大学大学院工学研究科建築社会基盤系専攻）

市村恒士

（室蘭工業大学大学院工学研究科くらし環境系領域）

近年、公共施設においても低コスト、サービス向上を目的とした指定管理者制度が導入されている。自然体験施設である登別市ネイチャーセンター「ふおれすと鉱山」においても、NPO法人「モモンガくらぶ」が指定管理者となり運営を担っている。当施設では、人材育成に力を入れており多数のボランティアが活動している。そこで、本研究では「ふおれすと鉱山」での人材育成システムに着目し、関係スタッフ、ボランティア等にヒアリング・アンケート調査を行った。その結果、人材育成（特にボランティアの育成）の成功要因について、ボランティアの「新規獲得」及び「継続」の2視点から整理できた。

ポスター発表

1.手稲鉱山エコミュージアム構想

椎野亜紀夫（北海道工業大学空間創造学部）

藏本拓磨（北海道工業大学工学部）

松平峻輔（北海道工業大学工学部）

細川雅矢（北海道工業大学工学部）

市街地近郊に残る産業遺産である手稲鉱山（札幌市手稲区）を対象にその実態を把握した上で、産業遺産を対象とした学習活動を地域住民主体となって進める「エコミュージアム」活動の可能性について検討を行った。手稲鉱山跡地には選鉱場跡地や鉱石運搬用の通洞跡などの産業遺産が現存し、近接する手稲西小学校には鉱石や写真などの展示室が設けられている。また市民団体による学習活動が進められ、人的ネットワークも構築されつつある。今後の展開として既存の資源・ネットワークを活用しつつ、地元の町内会、小学校、大学、行政機関の有志による協議会を立ち上げ、学習・保全活動を推進していくことが望まれる。

2. 地域協働による道路緑化の一手法

川口賢一（株式会社ドーコン）

小林海子（株式会社ドーコン）

本稿は、旭川市台場地区に位置する国道12号上り線（深川・札幌方面）のトンネル工事の完了後に発生した裸地部を対象地とし、地域協働による道路緑化を実施した事例を報告するものである。緑地を媒介とした活動が地域に根付いていくためには、地域住民が主導となって活動が続いていくような仕組みづくりが重要と考え、本取り組みでは、平成20年度から町内会、地元小学校関係者、福祉施設、道路管理者が協力して検討会を開催し、緑化計画を策定している。また、緑化計画に基づき、地元小学生が参加し、自生種による植樹会を実施している。

3. 江別市「子供が参加する公園づくり」10年の記録

及川渉（北海道造園設計株式会社）

佐藤俊義（北海道造園設計株式会社）

竹浪孝治（北海道造園設計株式会社）

佐々木一（北海道造園設計株式会社）

八幡和彦（北海道造園設計株式会社）

江別市では、平成10年から、通常の維持管理だけでは対応できず、公園全体の見直しが必要で、さらに地域住民から改善の要望が高い身近な公園について再整備を実施している。再整備を行うための計画づくりには地域住民や特に公園を使う主役である地元の子供たちに参加してもらい、たくさんの発見とアイデアを出し合い、楽しみながら計画づくりを行ってきた。チーム作りから、予算配分まで子供たちが行い、公園が完成した際には、花壇づくりや参加記念として自分で刻んだレンガ板を敷く作業も行っている。昨年でちょうど10年がたち10個目の公園が完成した。今後もこの試みは続けられるだろうが、10年目の節目にその記録を紹介する。

4. 旭山記念公園再整備プロジェクト

金清典広

（高野ランドスケーププランニング株式会社）

高野文彰

（高野ランドスケーププランニング株式会社）

上田悦路

（高野ランドスケーププランニング株式会社）

当初整備から30年以上経った平成13年から再整備

事業が始まり、「市民参加により計画を進め、そのプロセスを公開し、十分な議論を重ね創造して行く。」「豊かな自然環境を活かした、地域の文化をはぐくむ場を創出する。」「市民の記念植樹や、その他の樹林地育成をあらたに見つめなおす。」「少子・高齢化社会への対応と、ユニバーサルデザイン化への取り組み」という4つのコンセプトの基に、自然環境・駐車場利用実態調査、基本設計、実施設計と進めた。ワークショップの過程で公園で活動する市民団体が生まれ、丘陵地の公園でありながら車椅子使用者と視覚障害者が自力で移動できる園路や、様々なイベントに対応できる広場等を設けた。

5. 宮ノ丘幼稚園における参加型の取り組み

高野文彰

（高野ランドスケーププランニング株式会社）

上田悦路

（高野ランドスケーププランニング株式会社）

赤嶺太紀子

（高野ランドスケーププランニング株式会社）

宮ノ丘幼稚園は、手稲の山の麓に位置し敷地内は山の斜面と一体となり大変豊かな環境を有している。開園から20年以上が経過した園舎の建て替えを機に、敷地全体を積極的に活用するため全体計画の見直しを行った。園の職員や園児の父母、近隣の大学・専門学校生などと一緒に新しい幼稚園について議論し、計画や工事を進める一方で、実践として環境整備や自力建設に取り組んだ。ワークショップ・自力建設に関係者と共に取り組むことで、この場所への愛着を生み、幼稚園を核として新しい「むら」のようなコミュニティをつくることを目標としている。工事終了後もワークショップを継続し園の建設を続けている。

6. 日露景観比較評価における写真の選定

青木陽二

Elena PETROVA (State University of Moscow, faculty of Geography)

上田裕文 (札幌市立大学デザイン学部)

Yury MIRONOV (Vemadsky State Geological Museum of Russian Academy of Science)

2008年度より日本とロシアの共同研究として、自然風景の評価比較が実施されている。両国で同じ写

真を用い、風景評価をさせるには、両国を代表する自然風景の写真を用意しなければならない。そこで両国の研究者が多くの写真を用意し、研究者一人ひとりが、自分の好みで代表的な自然風景を選定した。その結果、両国を代表する35枚ずつの候補写真が得られた。選定の行動分析からは、日本を見た事のないロシア人が、見たことのあるロシア人と日本人とは違った選定をしたことがわかった。このことは景観評価に対する景観体験の影響を示し、重要な要因であることが分かった。

学生セッション

1.都市公園遊具の安全管理について

村林孝一・蝦名猛志・貞末繁樹・柳田貴雄
木村俊・立花宏介・柳谷隆太・佐々木敬太
(北海道工業大学工学部)

市街地におけるこどもの遊び場としての都市公園の役割は非常に大きく、公園遊具の安全管理が適切に行われることは重要な課題ある。しかしながら設置年代が古い公園では公園遊具の老朽化が著しく、財政難や人手不足の問題から行政による十分な安全管理が難しい状況にある。このような背景を踏まえ、札幌市手稲区を事例として都市公園遊具の点検記録簿を参考に、評価ランクの低かった事例を中心に現地調査を行い、その実態を把握した。また地理情報システムを用いてこれらを空間情報として整理した。

2.感じる公園

及川昌樹 (北海道大学生物資源科学科)

2009年度前期の3年学生実習において街区公園の設計を行った際の作品。既存の街区公園を1つ選び、立地条件、周辺住民の年齢統計から、利用者のニーズをふまえて設計した。本作品は西野アップル公園(札幌市西区西野6条10丁目)の改修案である。「親子」はもちろん「祖父母と孫」という視点から当公園の利用を考えた。公教育の場で失われつつある「感じる」ということをテーマに、五感、さらに想像力を刺激することがコンセプトとなっている。

3.いこいこう園

中谷葵 (北海道大学農学部)

2009年度前期の実習課題として作成した街区公園の改修案。元となった公園は、札幌市西区八軒にある八軒ひまわり公園である。周辺部にはスーパー・病院・住宅地があることから、「行こう」と「憩い」をキーワードに、幅広い年齢層を対象として設計に当たった。そのため、子供が思い切り遊べるスペースと大人がのんびり休憩できるスペースとに分けた。

4.公園に自生する希少山野草の育成に関する研究

岩佐美里 (札幌市立大学デザイン学部)

近年、世界的に生物多様性が著しく低下し、札幌市内においても希少植物が激減している。この状況を改善していくためには、希少植物を保全していくのと同時に、多くの人に生物多様性の重要性を認識してもらう必要がある。そこで本研究では、札幌市内にある滝野すずらん公園自然観察ゾーンと円山動物園の森の2カ所において、生物多様性の確保のために希少植物の保全を図り、公園の利用資源として希少植物を活用することを目指した。

5.水位、pH、ECの変動は湿原群落の形成にどのような影響を及ぼすのか?

永井雄基 (札幌市立大学デザイン学部)

pH(酸性度)、EC(電気伝導度)、水位(地表面からみた水面の位置)という3つの環境変量は、湿原群落の形成にとって、特に関わりの強い指標である。本研究はこの3つの変量を自動記録観測し、その平均値や変動のパターンや大きさが湿原群落にいかなる影響を与えるのかを明らかにしようとするものである。この研究は、北海道の太平洋沿岸の湿原の生物多様性保全や、ビオトープ造成計画に生かすことが期待できる。

6.ウトナイ湖北西岸における高茎湿生湿原の群落種組成研究

種村直子 (札幌市立大学デザイン学部)

近年北海道各地の湿原で、急速なハンノキ林の拡大とこれによる高茎湿生草原の減少が起こっている。しかし、現在この草原について明らかになっていることは少ない。そこで、まだ高茎湿生草原が残

っているウトナイ湖北西岸で、群落種組成研究を行うことにした。各種の統計解析を用いて群落を解析することによって、群落間で種組成を比較したり、群落レベルで環境因子との関係性を検討できる。この研究は、北海道の太平洋沿岸の湿原の生物多様性保全や、ビオトープ造成計画に生かすことが期待できる。

7.木質バイオマス利用を中心とした低炭素型地域づくりに関する研究—北海道旧大滝村を事例として
横山亜希子（室蘭工業大学建設システム工学科）
枯渇性資源である化石燃料に代わるエネルギーとして、森林・緑地を発生源とした再生可能で環境負荷のかからない木質バイオマスエネルギーが低炭素型の都市・地域づくりにおいて注目されている。そこで本研究では、北海道内でも数少ない木質バイオマスエネルギー導入地である旧大滝村（現伊達市大滝区）を事例に、材料輸送の過程でのCO₂排出を含めた木材・CO₂の循環フローや、エネルギーの導入によるCO₂・コスト削減効果等を明らかにし、木質バイオマス利用を中心とした低炭素型地域づくりについて検討することを目的とする。

8.登別市ふおれすと鉾山の森林保全管理に資する環境評価に関する研究
寺澤克俊（室蘭工業大学建設システム工学科）
登別市にある自然体験施設（ふおれすと鉾山）では、周辺の森林や広域の環境保全を目的とした各種活動の一環として、植樹や下草刈り等の森林保全管理に関して活動が行われている。しかし、その活動が実際に森林の環境保全効果の維持・向上に寄与しているかが不明確であり、評価を加えながらその活動を管理する必要がある。そこで本研究では、ふおれすと鉾山地区の森林を対象に、その自然環境を評価し、今後のふおれすと鉾山における森林管理活動のあり方について検討することを目的とした。

9.大規模小売店舗における外部空間の緑化手法に関する提案～コープさっぽろ東室蘭店をケーススタディとして～
阿部亮介（室蘭工業大学建設システム工学科）
従来、スーパーマーケット等の大規模小売店舗では法的規制がないことから、緑化がほとんど行われ

ていなかったが、近年、CSRや競合他社との差別化として緑化に対する意識が高まっている。一方で、このような空間の緑化のあり方については未だ検討すべき点が多い。そこで、本提案では大規模小売店舗の各外部空間（店舗周辺、接道面、駐車場内）における緑化手法を検討し、それらを用いて実際の大規模小売店舗の外部空間における緑化計画を提案する。

10.戸建て住宅における庭木の環境改善機能とその評価に関する研究
家入愛唯（室蘭工業大学建設システム工学科）
現在、都市緑地の減少が問題視され、住宅地における緑化推進が期待されている。このような状況のもと、住民が庭木の環境改善機能を認識することが緑化推進に寄与すると考えられる中、その機能を住民にわかりやすい形で情報提供することが求められている。そこで本研究では、庭木の環境改善機能を整理し、住民がその機能を容易に認識できる評価方法について検討することを目的とする。また、その評価方法をもとに今後の戸建て住宅の緑化のあり方等についても検討する。

11.北海道における防風林の利活用方策の検討
山縣陽子（室蘭工業大学建設システム工学科）
防風林は、本来耕地での風害や飛砂による埋没を防ぐために造成、あるいは残された樹林帯である。防風林には、そのような防風の役割の他に近年では、良好な景観の形成、生物多様性、さらにはレクリエーション的な役割についても期待され、適切に保全し利活用することが望まれる。そこで本研究では、北海道における防風林の歴史、現状の維持・管理状況を調査し、今後の防風林の利活用方策について検討することを目的とする。

ポスター発表

1. 近代の石巻における神社境内の井内石製施設の展開

小林 章

(東京農業大学地域環境科学部造園科学科)

石巻の神社境内における井内石の石材利用と石材業について現地調査と文献調査を行った。石巻には、式内社、招魂社、南朝ゆかりの神社などがある。神社境内の井内石製施設として鳥居、敷石、石段、玉垣、狛犬、燈籠、手水鉢、社号標、旗立石などがある。石巻の神社の井内石製施設は明治以降のものが多い。1900年、鹿島御子神社の「東宮殿下御慶事奉祝記念碑」が建立され、井内石製で形態はオベリスク風であった。仙台石材工業株式会社1896年に創業し、井内石は広い販路を持った。国家神道の発展期と井内の石材業の発展期が重なり、神社境内の施設が井内石に更新されていったといえよう。鳥居に関しては大型化が特徴であった。

2. 山形の風景の発見

嶋倉正明 (嶋倉風景研究室)

山形県にはその複雑な歴史背景や地形などから形成された独特のよき風景がある。その中から「里」、「農」、「まち」、「信仰」、「文学」、「望郷」などの切り口から県内各地の魅力ある風景を水彩スケッチにより示した。スケッチ技法をとったのは、無数の要素により形成される風景の中からそのポイントとなるものを明確に抜き出すことができるからである。その上で造園技術者として、そのよき風景を残して行くためにはなにをすべきかを提案した。提案の第一は、里の人々が「なんでもない普通の景色だ」と思っていることに対しなが美しいのかをスケッチにより明確に示すことである。

3. 既存シバの省力管理型芝生への転換技術の検討

名嶋英二 (東北緑化環境保全株式会社)

公園や工場等の緑地維持管理作業においては、芝生地管理(刈込み、除草等、消毒等)に多額のコストを費している。また、刈り取った大量の刈草の一般廃棄物処分も必要である。近年、草刈作業が軽減できる省力管理型芝生が開発されているが、既存の芝生の改修(撤去、張り芝)には多大なコスト及び

廃棄物処分が生じるため、既存シバに省力管理型芝生をオーバーシーディングすることの転換可能性について試験施工を実施した。結果として、施工後4年経過時点で概ね転換できたため、成果を発表する。

4. 公園を核とした地域コミュニティの醸成

榎 清英 (むつみ造園土木株)

県立公園の多面的な利活用・運営が問われている中で、指定管理者としての経年業務を通し、地域近隣にどのような拡がりや繋がりが生まれたのか、幾つかの事例を紹介する。一つは、近隣の地域町内会に、手作りの「公園かわら版」を毎月発行したり、公園管理事務所を「パークセンター」として改修し、色々な趣味の会・作品展そして気軽な休憩基地として開放している。また、地元農業高校の造園緑地科生徒を、長期に渡り現場作業体験研修として受け入れたり、地域の安全安心巡視車「パークエンジェルス号」発進させ、一公園から広域的な地域活動、パークマネージメントを報告するものである。

5. 地域景観に配慮したクラインガルテン整備に関する研究(受託研究:福島県南会津郡下郷町)

森山雅幸 (宮城大学食産業学部環境システム学科)

吉田美弓 (宮城大学事業構想学部事業計画学科)

近年の都市化や耕作放棄地の増加に伴い、これまで持続されてきた美しい農村景観の減少傾向が見られる。しかし一方では、都市住民が農村の地域環境の中で過す時間を求める傾向が表れ始めている。本研究では福島県下郷町を対象とし、農的土地利用や地域景観を活かした地域住民参加型のクラインガルテン整備計画のための基本構想立案に関するデザインプロセスの事例的検証を行った。そば畑の中のクラインガルテン整備計画は、町の風土・農地・景観等の地域資源を住民のために活用する景域保全を目的として計画立案した。今後の課題として、都市住民と地域住民が交流できる情報発信システム、維持管理組織の形成、利用企画等の検討事項が残った。

6. 霞城公園を活かすランドスケープデザイン

大橋秀行

(東北芸術工科大学建築・環境デザイン学科)

渡部 桂

(東北芸術工科大学建築・環境デザイン学科)

平成21年8月21、22日に学生による霞城公園（城址公園）を対象とするワークショップを開催した。霞城公園及びその周辺の踏査を行い、魅力的な空間、新たな活用が期待できる場所などを確認した。その後、抽出された意見を3つにまとめ「ランドスケープデザインで霞城公園をより魅力的にする」ことを前提にアイデアを検討した。具体的には、土塁に休憩所を設けアクセスをよくする、堀とその外縁部の空地に対してはオープンカフェとボートの復活、本丸周辺の復元を楽しむ工夫ということが出された。これらは国の史跡である対象地では現実的に難しい部分もあるが、今後、観光と市民の日常的な利用を両立するためには幅広い議論が必要だろう。

口頭発表

1. パトリック・ブランの“垂直の庭”における設計理念と設計手法について

深水崇志（千葉大学大学院園芸学研究所）

赤坂 信（千葉大学園芸学部緑地環境学科）

フランス人植物学者パトリック・ブラン（Patrick Blanc, 1953-）が制作している“垂直の庭”は、一つの壁面に多彩な植物が混植された、意匠性の高い壁面緑化である。本研究では、そのような“垂直の庭”の植物構成手法について着目し、パトリック・ブランがどのような意図の下、どのような手法を用いて、植物を構成しているのかを明らかにするために考察を行った。結果、パトリック・ブランは、植物の形態、季節による変化などといった植物の性質を考慮しながら植物を構成するとともに、森林の階層構造を反映させた植物の配置を“垂直の庭”の中で行っていることが確認できた。

2. 20世紀初頭に造られたイギリスの日本庭園

大出英子（目白大学短期大学部生活科学科）

鈴木 誠

（東京農業大学地域環境科学部造園科学科）

近年、日本国外の日本庭園に関する研究が、日本在住の造園家のみならず海外の研究者や、造園学以外の分野の研究者の参加もみながら進展している。本研究は、海外の日本庭園研究の一環として、20世紀初頭の英国における日本庭園築造ブームに着目し、また、その頃の日本庭園理解と日本庭園作庭に及ぼしたであろう、1910年の日英博覧会の日本庭園を基軸として、これまで文献調査、現地調査から得られた知見を基に、当時の英国における日本庭園についての一考察を試みた。

3. 国際社会における海外の日本庭園の評価—試論的考察—

鈴木 誠

（東京農業大学地域環境科学部造園科学科）

『「海外の日本庭園」調査報告書』（日本造園学会、2006）が刊行され、その全体像が明確になった。しかしこの報告書では、海外の日本庭園の評価についての詳細な検討にはいたっていない。そこで、昨年発表した「国際社会における日本庭園の意義と役割」

に引き続き、この考察では海外の日本庭園の評価をとりあげ、その評価は多面的であるべきことを提案した。そして、試論的に海外の日本庭園についての6つの評価項目（評価軸）、すなわち①真正性（日本式庭園）、②地域社会性（認知度・人気度）、③国際関係性（日本との友好交流）、④歴史性、⑤利用性、⑥管理・運営性、を提示し、この評価軸を用いて事例的に庭園評価の実際を紹介した。

4. 創設期（1902-1911）における東京帝国大学理科大学附属植物園日光分園の敷地構成等について

西村公宏（茨城県県南県民センター建築指導課）

本稿では、東京大学及び日光東照宮所蔵の資料等を用いて、創設期（1902-1911）における東京帝国大学理科大学附属植物園日光分園の正確な位置及び敷地内の構成について、下記の3点を指摘した。①敷地は、栃木県上都賀郡日光町大字日光字佛岩地内2323番、2325番、2326番、2327番1、2327番2であった。②敷地内は岩石を主体とする構成で、流れ、築山、池水が配され、高山植物の培養がなされた。③既存の岩石は、敷地内を特徴付けたが、反面、高山樹木の栽培を阻み、移転の一因ともなった。

5. 明治の東京における水辺空間の生活の景について

高野麻衣（世田谷区役所）

荒井 歩（東京農業大学地域環境科学部）

本研究では、明治時代東京の水辺空間における人間の行動と、形態・デザインとの関係を明らかにすることを目的とする。なお、対象とする水辺空間は、自然河川・掘割河川・内濠・外濠・水路とした。「風俗画報」における山本松谷の石版画のうち、1909（明治42）年の東京地図にて位置を確認できる84点をテキストとして選定した。テキストを用いて、水辺空間の形態・デザインの要素を、護岸・境界・連絡施設・植栽として整理した。また、人間の行動は、水との関わり方に着目して整理した。これらをもとに、水辺空間ごとの特徴を明らかにした。本研究の結果、明治東京の水辺空間は、その形態・デザインと人間の行動との関係により、固有性を有していたことが明らかになった。

6. 都市臨海部における港湾緑地の位置づけの変遷

に関する研究—みなとみらい21新港地区シンボル緑地を対象に—

宮森 隆 (日本大学大学院理工学研究科)

横内憲久 (日本大学理工学部建築学科)

岡田智秀 (日本大学理工学部海洋建築工学科)

福田朗大 (日本大学大学院理工学研究科)

港湾緑地は高度経済成長に伴う臨海部の環境汚染や水辺レクリエーション機能低下に対応すべく1973年の港湾法改正により全国で整備展開された。以降も、港湾遊休地の有効活用を契機に整備は加速している。しかし、時代ごとに変容する港湾空間に対応せず、利用者による利用の難い緑地現出が懸念、さら、整備指針は1976年発行の港湾緑地整備マニュアルのみであり、現状に即した指針が求められる。そこで、みなとみらい21新港地区の緑地に着目し整備方針を把握した。その結果、港湾緑地への要件は港湾の歴史的施設を活用することで、利用者による土地の持つ履歴を認知させること、また、市街地と港湾あるいは緑地相互のネットワーク機能としての期待を捉えた。

7. ビデオカメラを用いた尾瀬国立公園におけるシークエンス景観の解析

國井洋一 (東京農業大学)

古谷勝則 (千葉大学)

わが国における山岳性自然公園は、散策中に様々な眺望や景観を楽しむことができる貴重な資源である。尾瀬国立公園 (以下、尾瀬) に関しても、森林、湿原、湖沼等を構成要素とする多くの景観が存在している。また、尾瀬の来訪者は主として木道上から進行方向の景観を捉えることとなるため、歩行移動によるシークエンス景観を感じるようになる。そこで、本研究では尾瀬の木道を歩行し、歩行中の視線方向の景観をビデオカメラにより動画像として記録し、撮影した動画像の各フレームに対するフラクタル解析を行うことにより尾瀬の木道におけるシークエンス景観の解析を行うこととした。さらに、動画像撮影中にはGPS測位も同時に行い、歩行距離および標高のデータも取得し、位置変化が来訪者におよぼす影響を推察する。

8. 剪定強度の相違がシラカシの樹形と樹勢に及ぼす影響

古平瑞季 (東京農業大学地域環境学部造園科学科)

内田 均 (東京農業大学短期大学部環境緑地学科)

堀 大才 (NPO法人樹木生態研究会)

本研究は、シラカシ苗木を用いて、無剪定、1/4剪定 (樹高の上から1/4の高さで水平切り)、2/4剪定、3/4剪定の各区に分け、剪定の有無と剪定強度が樹形と樹勢及びその後の成長に及ぼす影響を明らかにするために行った。結果は、9ヶ月後の掘取り時の大きさで無剪定区が最も大きかった。一方、剪定区は地上部重量の減少だけでなく、地下部の根量も著しく減少し、とくに細根量が減少していた。中でも3/4剪定区の減少が著しかった。植付け時根鉢より外に発生した新根はやはり無剪定のものが最も多く、剪定区では少なかった。さらに、剪定区では植付け時根鉢内の根も植付け前よりも減少していた。これらの結果から、少なくとも剪定は樹木の生育を促進せずかなり抑制するものであり、特に根系に著しい影響を与えることがわかった。必ず葉量の減少を伴い、樹木成長に大きな影響を与える剪定管理を行うに当たり、細心の注意を払う必要があることが推察された。

9. 全国の街路樹にみる植栽管理実態

内田 均 (東京農業大学短期大学部環境緑地学科)

塩田友里恵 (榊谷園芸)

都市における貴重な緑である街路樹の植栽管理実態を把握するため、各県にアンケート調査を行った。その結果、植栽目的は「景観の向上」や「日陰の提供」が多く、街路樹の問題点は「倒伏・枝折れが発生し危険」や「枝葉や根が民家へ越境」という街路樹の成長に伴うものが多かった。9割の県で管理する業者を毎年替えているものの、同一業者による管理の方が適切な管理ができるので継続管理は「良い」と6割が意識していた。夏場の剪定は、8割近くが「通行の支障防止」などの理由で行うべきと答えているが、植栽目的や街路樹の問題点からみると、矛盾を生じていることが浮き彫りとなり、景観面や樹木の生理面からも夏場の剪定は軽い剪定にとどめておく方が良いと推察された。

10. 街路樹用樹種の選択における住民と専門家の意向の比較

藤崎健一郎 (日本大学生物資源科学部)

片岡紗織（日本大学大学院生物資源科学研究科）

勝野武彦（日本大学生物資源科学部）

街路樹用樹種の選択に役立てることを目的に、生長速度、花や実、鳥や虫に対する考えなどについて専門家と住民にアンケートを行った。生長速度は遅い方が選択された。落葉樹が常緑樹かについて専門家は同数程度であったが、住民は常緑樹の方が多かった。花は綺麗な樹種、実は目立たない樹種が多数意見であった。蝶などを呼べる樹種との回答は少数で、虫のつかない樹種を選ぶ方が多数であった。郷土樹種にという回答より外来樹種でも良いとの回答が多かった。具体的な樹種について住民にはハナミズキやプラタナスの人气が高かったが、両種は専門家の評価は低かった。イチヨウ、ケヤキ、コブシなどは双方から評価が高かった。

11. 妻籠宿の町並み保存における木曾ヒノキ林保護に至る住民の見方

村松保枝・赤坂 信

（千葉大学大学院園芸学研究科）

妻籠宿の町並み保存（大面積の森林を保存対象とする）から木曾ヒノキ林保護にさかのぼる住民の見方を、歴史的経緯に基づいて明らかにした。かつてと現代の森林保護の意味は大きく異なる。生産された材木は近世には木年貢や城下町建設の材として活用されたが、1724年の林政の改革で城山・水上山が継続的な活用のため留山（とめやま）に指定された。一方、住民は明山（あけやま）で日常の雑木を得ていたが、なかには近代まで伊勢神宮式年遷宮用材として活用された森林があった。1904年には妻籠・男たる御料林が神宮備林に指定された。そうした官行事業では、妻籠宿の住民が伐木、運材に関わる人夫を組織し、女子も補助作業で日給による賃金を得ていた。事業で得られる木材の他、山の仕事に関する労働に至るまで制度化されて森林が管理されていた。

12. 港区青山・表参道におけるファッションショップの形成過程とその特徴

長谷川照裕（株式会社花弘）

服部 勉（東京農業大学造園科学科）

本研究ではファッションタウンとしての青山・表参道がどのような過程のもとに形成され、現在に至ったかを明らかにすることを目的とした。その結果、

青山・表参道におけるファッションショップの展開の特徴としては、対象地において中核的なファッションショップが登場し、その影響に伴いファッションショップ群が形成されるという共通点が見られたが、メンズ、レディース、メンズ・レディースショップの展開には相違が見られた。また表参道におけるブランドファッションショップとカジュアルファッションショップの分布特性としては、表参道では、青山通りとは異なり、ブランドショップの形態による明確な境界が見られた。

13. 都市公園の空間変容とデザイン認識に関する研究—関東地方における日本造園学会賞授賞作品を事例として—

溝杭恵子・木下 剛

（千葉大学大学院園芸学研究科）

本研究は、歴史的、文化的視点より、保存に値する都市公園の特質について明らかにする研究の基礎として、一定の社会的評価を受けてきた都市公園（日本造園学会賞を受賞した関東地方の都市公園）が、いかなる理由でどのように変化してきたのかを設計図書及び現地調査、管理者への意識調査により明らかにした。またそれを通じて、管理者のデザイン認識について考察した。その結果、多くの公園で、利便性の向上や施設の老朽化により、部分的な改修が行われていた。竣工当初のデザインが大きく損なわれるような全面的改修や管理はおこなわれていないが、ほとんどの物件で、管理者は授賞の事実や理由を知らずに管理業務、改修工事にあたっており、デザインへの認識を高める働きかけが今後の課題とされた。

ポスター発表

1. 霧ヶ峰における二次草原の管理を目的とした類型区分の試み

熊田章子（株式会社地域環境計画）

栗原雅博（株式会社自然資源計画）

長内健一（霧ヶ峰ネットワーク）

対象地である霧ヶ峰地域（八ヶ岳中信高原国定公園）は、約2300haもの二次草原が広がっている。しかし、近年、草刈りや火入れなどの草原管理が行われなくなったことにより、樹木の侵入や種組成の変

化、景観の変化が見られるようになった。現在行政やボランティアによる管理が行われているが、広大な二次草原を管理していくためには、効率的・効果的な手法・管理サイクルが望まれる。そこで本研究では、優先的に管理を行うべき地域の選定および植生タイプにあわせた効果的な管理手法の採用のための検討材料を得ることを目的として、既往文献から得られた二次草原の遷移の条件と2008年に作成した植生の土地被覆図および地形分類等の条件をあわせてタイプ分けし、草原管理のための類型区分図の作成を試みた。

2. フトン籠を利用した緑化における基盤資材と充填密度の違いと保水性について

赤池 真 (日本大学大学院生物資源科学研究科)

大澤啓志・勝野武彦 (日本大学生物資源科学部)

基盤資材と充填密度の違いが保水性におよぼす影響を実験的に把握した。基盤資材としてパーライト系、火山砂利系、腐葉土、黒土の4タイプ、充填密度として山中式硬度計による指標硬度8mm、14mm、20mmの3タイプを設定した。これらの組み合わせ計12通りについて、一辺30cm立方のフトン籠を用意し、十分灌水した後、7～14日間土壌水分の変化を計測した。その結果、黒土以外は充填密度を増すことで保水性が向上し、測定部位による差が小さくなった。黒土は、充填密度による保水性の違いはほとんど見られなかった。灌水直後の重量は、腐葉土<パーライト系<火山砂利系<黒土の順であり、腐葉土以外は充填密度の増加に伴う重量増加割合は一定であった。

3. 江の島花と庭園の回廊づくり

島田正文 (日本大学短期大学部)

津田秀文 (旬ワイズクリエイティブ)

江の島は古くから、信仰の島とともに物見遊山の地として親しまれ、現在に至るまで身近な観光地として賑わいを見せている。また藤沢市景観計画の特別景観形成地区としても位置づけられており、今後は立地資源をいかした統一感のある環境整備が求められている。本計画は、江の島の自然・歴史・文化に培われた多彩な観光資源を積極的に関連づけ、「花と庭園の回廊」として全島を通じた環境整備とその魅力を伝える情報発信の仕組を検討したものである。計画では既存の観光資源結ぶ回遊動線沿いに

花修景を組み込み、合わせて花観賞・休息の場となる庭園的な広場を配したネットワークを構築したものである。また、ネットワークの拠点となる2広場については具体的な土地利用を策定するとともに、来島者等に本計画を提示し、その評価を行った。

4. 茅ヶ崎市みどりの基本計画策定の取り組み

北川明介・八色宏昌 (榊ブラック)

島田正文 (日本大学)

阿部伸太 (東京農業大学)

茅ヶ崎市では平成8年に緑の基本計画を策定し、その後、都市緑地法の改正、都市マスタープラン等の関連計画の改正・策定が行われ、関連法・計画との整合を図る必要があった。また、前計画の進捗を検証した結果、計画目標の達成が困難な状況であり、実効性のある計画策定が課題であった。そのため、本計画では、特に実行性を高めることを主眼に、市民研究会および策定委員会での検討等を通じて84の個別施策を計画し、施策の実施主体、方法、事業概算、施策の展開時期を示した。また、優先施策として、特別緑地保全地区指定など20施策を位置づけた。さらに、計画の推進のため、施策における市民等の役割を明記し、計画の検証機関の設置、資金の充実などを計画に位置づけた。本報告では、これらの計画策定の課題と対応内容を報告する。

5. ロンドン市街地拡張の過程における所領地開発の役割

山岡由貴 (千葉大学園芸学部)

17世紀から始まったロンドン、ウェストエンドにおける、スクエアを中心とした所領地開発について研究し、所領地開発で作られたスクエアの性格、一般開放されたことによって果たした役割について考察する。元々、貴族の私有地として開発されたスクエアも管理や土地所有形態の違いによって性格は変わっていく。ソーホーなどのスクエア周囲の住民が上流階級から中流階級の住宅地や店舗へと変わっていくことでスクエアの公共利用への流れは促進され、住環境の改善の声に応じていく。一方、メイフェアなどの大土地所有者による土地所有が保たれている所領地は品位が保たれ、公共性が入り込まないため、スクエアの私的利用が保たれた。

6. 北京と東京における都市公園の水辺利用実態と利用意識に関する研究

劉 小溪（日本大学大学院生物資源科学研究科）
藤崎健一郎・勝野武彦（日本大学生物資源科学部）

本研究は、北京と東京で水辺のある公園に着目し、公園の構造、利用実態、利用意識についての比較を行い、共通点と相違点を明らかにすることを目的として実施したものである。北京市から龍潭公園と玉淵潭公園、東京から水元公園と井の頭公園を対象地に選定し、各公園の構造を比較し、現地において利用実態調査ならびに利用者意識のアンケートを実施した。アンケートについては各公園で299～450人の回答を得た。北京の公園では東京に比べて公園に毎日来園する人や早朝に訪れる人が多いことなどの特色が見られた。公園に求めるものとして、両都市とも自然や安らぎとの回答が多かった。東京では季節感との回答が多いという特徴などが見られた。

7. 千葉県市原市周辺を事例対象地とした街路樹の病虫害発生状況調査

藤崎健一郎（日本大学生物資源科学部）
中平 功・吉田欣司・立山富士彦・中村秀樹
諏訪原幸広（内山緑地建設株式会社）

街路樹には病虫害の発生しにくい樹種を選び、また発生時期を予測して速やかな防除を行うことが望ましい。各樹種の病虫害の概要は図鑑等で知ることができるが、実際の発生状況調査事例は多くない。千葉県市原市周辺において9樹種の街路樹を選定し、2008年6月～10月および2009年6月～9月の期間、ほぼ月1回病虫害発生状況を調査した。9樹種の中で、イチヨウは病虫害共に両年とも少なかった。虫害はサルスベリ、病害はハナミズキで被害が大きかった。クロガネモチの虫害やサルスベリの病害は年による差が大きかった。発生の多い虫害はアブラムシやカイガラムシ、病害はすす病、炭そ病、斑点病などであった。各地で同様の調査が継続的に行われることを期待する。

8. 街路樹用樹種を対象とした枝伸長速度の比較調査

片岡紗織（日本大学大学院生物資源科学研究科）
藤崎健一郎・勝野武彦（日本大学生物資源科学部）
街路樹の適切な植栽には、植栽地の条件に応じて

樹形や生長速度が見合う樹種を選ぶことが必要である。これらについておよその目安は図鑑等で知ることができるが、実測して公開された資料は少ない。そこで街路樹用樹種の枝の伸長速度と葉数を比較することを目的として本研究を実施した。神奈川県藤沢市の日本大学キャンパス内および埼玉県内の道路に植栽されている樹木から9種を選び、枝の伸長量と新枝1本あたりの葉数を2008年5月から9月まで月1回測定した。9月までの伸長量は10cmから120cmまでの差があり、樹種による順序は図鑑等とは必ずしも一致していなかった。枝の伸びる時期や葉数についても樹種による違いがみられた。

9. ボランティア・サポート・プログラム参加団体による国道の美化・清掃活動について

藤崎健一郎・八木佑衣・勝野武彦
（日本大学生物資源科学部）

国道におけるボランティア・サポート・プログラムの実施現況についてアンケートおよび現場調査を行った。このプログラムは、参加団体が国道脇の清掃や草木の管理を行い、道路管理者（国道工事事務所等）が用具を貸与あるいは支給し、協力者（市町村）が連絡窓口を担当するものである。関東地方整備局管内で活動を行っていた103団体の活動について調査し、96団体の情報を得られた。団体の性格は住民団体53%、企業30%、学校9%、その他8%だった。活動参加者へのアンケートから、「道路が美しくなった」ことその他、「公共マナーに関心を持つようになった」「参加者間のコミュニケーション」などにも大きな効果が得られていることがわかった。

10. 東京ふれあいロードプログラム参加団体による都道の美化・清掃活動について

藤崎健一郎・森谷麻里恵・勝野武彦
（日本大学生物資源科学部）

東京ふれあいロードプログラムは、都道を活動場所とし、参加団体が清掃や緑化活動を行い、道路管理者である東京都が協力・支援を行う仕組みである。平成14年に試行され、15年度から本格的に実施されている。参加団体は2008年4月末現在74団体であった。連絡先のわかった24団体に2008年9月にアンケートを送付し、14団体から回答を得た。参加団体は、自治会、小学校、PTA、商店街、法人会、企

業など様々であり、このプログラムに参加するため新たに作られた団体もあった。1回の活動への参加者数は10人以下と11人以上が半々であった。参加者個人の参加動機や活動の効果についてのアンケートには84人から回答を得た。4団体の活動について実地調査を行った。

11. 路地空間への緑導入による地域再生—神田錦町をケーススタディとして—

黒須恵太 (前明治大学農学部)

松下由佳 (前明治大学農学部)

興水 肇 (明治大学農学部)

緑導入による地域再生の可能性を検証するため、業務地化が進んだ典型的な空間特性を有する東京都千代田区神田錦町をケーススタディに、歴史文化、緑、アクティビティに関する資料収集、現地踏査を行い、緑化のコンセプトを導き出し、緑化案へと展開した。それを、当該地区で活動しているNPO法人に提示し、緑導入前の空間印象を評価した。その結果、作成した4つの緑化案は、アクティビティ形成に効果があることが示唆され、緑導入により路地空間を中心とした地域再生が可能であることが考えられた。

12. ポトス鉢を置いたモデル実験室内におけるホルムアルデヒドの動態

高橋沙織 (前明治大学農学部)

興水 肇 (明治大学農学部)

ポトス (*Epipremnum aureum*) の長期的なホルムアルデヒド除去効果を明らかにするため、植物体、土壌ごとの浄化量を測定し、実験装置レベルにおけるホルムアルデヒドの動態把握を試みた。その結果、「空気中から植物」「空気中から土壌」「空気中から水」「植物から空気中」「土壌から空気中」「水から空気中」と設定したホルムアルデヒドの動態は、「空気から植物、土壌、水」が重要であることが示唆された。また、実物大居室を想定したシミュレーション結果から、除去に有効な個体数の存在が示唆された。

13. PREFERENCES FOR PLANTS OF RAISED-BED IN HOSPITAL'S COURTYARD-CASES OF ACUTE GENERAL HOSPITAL IN TOKYO

Mayuko Ishii

(Association of Graduate Schools Science and Technology, Chiba University, Japan)

Yutaka Iwasaki

(Graduateschool of Horticulture, Chiba University, Japan)

The purpose of this was study to determine users' preferences for plants in hospital's courtyard. This was accomplished by conducting a survey based on questionnaires and interviews. The survey results validated that users prefer planting in a raised-bed in the courtyard. Six Different schemes for planting were considered. Most users expressed a preference for colorful and visually stimulating flowers, as well as the calming sensation of green foliage. In addition among users, patients or family and hospital workers differed in the priority that they placed on the elements of planting.

14. 都市緑地の中で食事をとる際の印象評価に関する基礎的研究

大倉善博 (千葉大学園芸学部)

石井麻有子 (千葉大学大学院自然科学研究科)

岩崎 寛 (千葉大学大学院園芸学研究科)

都市緑地の利用には様々なものがあるが、オフィス街などでは昼食等の食事をとる場としての利用も多く見られる。しかし、屋外の緑地で食事をとる際の心理的効果を調べた研究はほとんど見あたらない。そこで本研究では、都市緑地と市街地の中で食事をとる場合の印象評価を比べ、都市緑地で食事をとることの効果を検証し、今後の都市緑地の配置や計画に有用な情報を提供することを目的とした。調査は松戸市内の都市緑地と市街地においてSD法による印象評価とアンケート調査を行った。その結果、印象評価では、都市緑地での食事が市街地に比べ、よりおいしく感じられることが分かった。また、アンケートの結果、自然の中での食事のほうが普段の食事より楽しく、おいしく食べられた経験を持つ人が多いことが分かった。

口頭発表

1. 「境内環境」及び「管理状況」からみた鎮守の森の保全に関する研究

長谷川泰洋（名古屋市立大学大学院
芸術工学研究科博士後期課程2年）

名古屋市の神社（106社）を対象にしたアンケート調査により、神社を「境内環境」及び「管理状況」の観点から分類し、鎮守の森の保全のための課題を整理することを目的とした。「管理状況」については、人材不足、費用不足、苦情・トラブル、啓蒙・広報不足、落葉処理について、「境内環境」については、森の状態（樹林密度、緑被度）、大木の有無（保存数を利用）、駐車場整備台数を分析した。この結果、住居系商業型の2500㎡以上の神社では森が苦情・トラブルの元になっていることが多く、また、1000㎡以上2500㎡未満の神社では維持管理の費用不足の事例が多いことが認められた。これらの事例では、森の伐採及び駐車場化が進むと考えられ、対策が必要である。

2. 街路樹のアセットマネジメント～Excelで行う成長予測～

今井和志（名古屋市昭和土木事務所緑地係）

名古屋市では、平成19年度にアセットマネジメント計画策定に着手し、今後50年間に必要な各施設の維持管理費を算出することとなった。しかし、生き物である街路樹は年々成長するため、成長に合わせて維持管理費は年々増加するが、成長速度は未解明な部分が多く、維持管理費の予測がつかない。そこで、剪定業務委託の成果品である剪定実施報告書に記載された幹周りを分析することで標準成長モデル式を求め、年毎の成長量を推計、工事などによる街路樹の増減も考慮して50年後の剪定必要額を算出した。

3. 校庭の芝生化 - リサイクル手法による芝生づくり -

衛藤徹雄（（社）日本造園建設業協会中部総支部）

最近、校庭の芝生化の動きが全国的に広がっている。児童生徒が、豊かなグラウンドで楽しく安全にスポーツに親しめる環境を創り出すため、運動場の芝生化が推進されている。また、地球温暖化防止対

策として屋上緑化や壁面の緑化とともに校庭の芝生が重要な役割を果たすと言われている。校庭の芝生化は一部の都県では盛んに推進されているが、全国的には低調と言わざるを得ない。その理由として、芝生造成にかかる費用が高いことが上げられる。今回、芝生管理作業で発生する廃棄物を利用して安価で簡単に芝生を造成する方法を紹介する。コアリング作業（芝生更新作業）によって芝生から抜き取ったコア（廃棄物）を苗として利用し、芝生を造成する方法である。

4. 「愛・地球博記念公園」における県民協働による管理運営の実践について

速水厚志、則竹登志恵（玉野総合コンサルタント(株)
建設技術部ランドスケープ課）

栗田雅貴（愛知県建設部公園緑地課）

「自然の叡智」をテーマに開催された国際博覧会「愛・地球博」の長久手会場跡地に整備された「愛・地球博記念公園（愛称：モリコロパーク）」において、博覧会の大きな成果である「市民参加」を継承する取り組みとして、県民と行政とのパートナーシップによる公園管理運営組織「公園マネジメント会議」が平成21年3月に正式に発足した。本発表は、博覧会の理念と成果を引き継ぎながら、県民、NPO、大学、企業、行政などの様々な主体の参画による協働での公園管理運営に取り組む事例として、発足に至るまでの約2年間に渡る準備期間での取り組み概要と、正式発足後から現時点までの活動の状況及び今後の方向性や課題等について報告する。

5. 農村地域における景観育成住民協定締結後の景観に対する住民の取組と意識の変化

小口一樹（信州大学大学院農学研究科）

上原三知・佐々木邦博（信州大学農学部）

農村景観は、日本社会の歴史の残映をとどめており、また、そこに住む人々の生活に合わせて着々と変容し続けていくものである。しかし、近年の宅地造成や圃場整備事業、屋外広告の増加により、農村景観の価値は急速に失われつつある。それに対して、2005年6月1日に景観法が全面施行され、地方公共団体の景観に関する計画や条例、それに基づく地域住民が締結する景観協定に、実効性・法的強制力がもたされることとなった。本研究では、上伊那郡高遠

町の農村地域を対象に、景観形成住民協定の内容と、住民の景観に対する取組や意識の変化を示し、農村地域における、よりよい景観協定の活用法について考察を行うことを目的とする。

6. 長野県伊那盆地における小流域単位での水生植物の分布と立地環境との関係

御池俊輔（信州大学大学院農学研究科）

大窪久美子（信州大学農学部）

二次的自然である水田や溜池、水路は生物の生息地として重要であり、近年そこに生育する水生植物の変化や変質が懸念されている。これらの水域は単独では成立せず、周囲環境と密接な関係を持ち、より広域的な相互作用の中で成立していると考えられる。したがって地域スケールでの水生植物の保全を考える場合、用水の流域および流程に伴う水生植物の分布を把握することが必要となる。そのため本研究では一つの水源利用地域を小流域単位で扱い、そこに生育する水生植物の分布および立地環境を標高単位で把握し、それらの関係を明らかにすることを目的とした。調査地は長野県伊那盆地天竜川水系にて複数箇所広域で実施し、各地の比較結果を報告する。

7. 地域の生物多様性を学ぶ自然観察会の取り組みと課題 ～県営東三河ふるさと公園の事例～

梶野保光（NPO法人東三河自然観察会）

県営東三河ふるさと公園は、豊川市の遠見山・新宮山とその周辺の自然環境を生かしながら、平成7年度より事業着手し、平成18年3月に第1期区域の一部（62.4ha）が開園した。NPO法人東三河自然観察会は愛知県都市整備協会の依頼により、同4月から毎月第3日曜日に地域住民対象の自然観察会を年間開催している。自然観察会は「ふるさと公園」の自然環境の様子を毎月、モニタリングして、造成された公園施設の年数が経過することによる自然環境の変化や生物多様性について地域住民と自然観察会を通じて学んだ事例とこの豊かな自然を生かしながら、都市公園として、生物多様性の拠点を育むための今後の課題について考察する。

8. 新潟県十日町市の棚田における埋土種子による植生遷移を利用した現代アート作品

相田 明（岐阜県立国際園芸アカデミー）

大地の芸術祭「越後妻有アートトリエンナーレ2009」（新潟県十日町市、津南町）に出展した『遷移/succession』は、造園学的発想にもとづく「農」と「芸術」が融合した土に還る現代アート作品である。日干しレンガは地材材である棚田の表土と藁を使い、緑化盤のように型枠に土を入れ締め固めてつくった。684個の日干しレンガは長方体（1.9×1.3×1.3m）に積み上げられた。風雨と時間の経過によって朽ちた日干しレンガから埋土種子が発芽し、植生遷移することにより作品が「成長」する。また、制作は岐阜県立国際園芸アカデミーの学生が「環境アート演習」の授業として受講したほか、市民ボランティアが協働として参加した。

9. 赤沢自然休養林における散策の利用実態とその評価に関する考察

張 桐（信州大学大学院農学研究科森林科学専攻）

上原三知・佐々木邦博（信州大学農学部）

近年、レクリエーション活動への期待が高まり、森林がもつ保健休養の機能が重視されてきている。長野県木曾郡上松町に位置する赤沢自然休養林では江戸時代からヒノキ林が貴重な資源として守られており、昭和44年に日本で初の「自然休養林」に指定され日本の森林浴の発祥地として、森林浴の散策路は8つが整備されている。本研究では赤沢自然休養林を対象とし、林班図と現地調査により、散策路の配置、高低差、舗装を把握した。また昨年のポスター報告により、散策路の利用に偏りが確認されたため、その理由を探るために新たに利用者の散策特性、及び散策路の選択、散策路の評価を調査分析した。

10. 東岡崎駅南広場設計における造園と建築とのコラボレーション

丹羽康文（トヨタホーム愛知（株）

設計部、設計1グループ）

通常、設計委託する場合は、コンサルタントに目的や要旨を設計仕様記入し、設計に携わり設計案の提出を待って、数回の修正を行って設計を進めていくが、駅前広場は、都市の顔であるため、その都市の個性を十分発揮するとともに「都市のオアシス」としての空間でもある。そこで、造園家と建築家がタッグを組んでいかに良質な都市空間づくりをして

いくつか考えた駅前広場である。

11. まち歩きによる緑の景観の選好特性に関する研究

長谷川泰洋・林まな美・岡村穂
(名古屋市立大学芸術工学部)

名古屋市中種区にある住宅地において、まちの緑(庭木、生垣、花壇、街路樹等)や神社の森の景観に対する印象と保全の意識を調査し、保全・創出が望まれる緑の景観の把握を目的とした。まちの緑の景観評価は、調査者がまち歩きを行ないながら目に付いたまちの緑について、その印象や保全の意識を評価した。神社の森の景観評価は、城山八幡宮(3haの森を有する)周辺で設定した14箇所の視点場から森を眺め、それぞれの景観の印象と保全の意識を評価した。結果として、好まれるまちの緑の形態や神社の森の景観を構成する要素が把握できた。

12. 森林セラピー基地の異なる散策路における森林浴効果に関する基礎的考察

上原三知(信州大学農学部)

森林セラピー実行委員会により森林セラピー基地に指定されている長野県赤沢自然休養林、信州大芝高原みんなの森の森林浴コースごとにPOMS短縮版によるストレスに対する反応値と、その評価に関わる調査を行った。コースごとのストレスや活気に対する反応値の変化をみると、コース評価の合計点と、写真の撮影枚数が最も少ない中立コースでは活気の反応値の上昇がみられず、次いでコース評価が低く、撮影枚数が少なかった向山コースでも統計的に有意なストレス反応値、活気反応値の改善がみられない結果となった。

13. あいち森と緑づくり事業(都市緑化推進事業)の現状

小林恒雄(愛知県建設部公園緑地課)

平成21年4月より「あいち森と緑づくり税」を導入して、森林や里山、都市の緑を保全整備するなど様々な取組が始まっている。いわゆる「森林環境税」の導入は全国で30番目であるが、都市の緑まで税を投入するのは、兵庫県について全国で2番目である。この、あいち森と緑づくり都市緑化推進事業の現状と課題を報告する。

14. 名古屋市における土地区画整理公園の展望と課題～名古屋市の都市緑化問題の展望～

永井謙次(名城大学大学院農学研究科)

土地区画整理事業による公園地の留保は、市街地において公共用地取得が困難な我が国で、公園公共用地取得の手段に用いられ、公園造成に大きく寄与してきた。そこで本研究では、全国で最も土地区画整理事業が盛んな都市と言われる名古屋市において、土地区画整理事業によって整備された公園(以降、区画整理公園)について、戦後からどのように推移し、名古屋市全体の公園の中で区画整理公園がどのような位置づけにあるのかと共に、土地区画整理事業により、都市公園は増加しているが、市街化が進むことで農地や郊外の森林などの自然環境が破壊され、市全体としては緑が減少傾向にあるので、この問題についても考察を行いたい。

15. 日本、中国及び韓国におけるパブリックスペースの比較について

岡村 穂・長谷川 泰洋・崔 碧エイ

(名古屋市立大学芸術工学部)

中国の東北部にある敦化市(漢民族と朝鮮民族が混在するエンベン朝鮮民族自治区)、韓国のソウル市、及び日本の名古屋市の3都市を調査する機会に恵まれたので、それぞれの都市の中心街にあるパブリックスペース(公園、広場、ポケットパーク、建築外構としてのオープンスペースなど)について、屋外空間利用に関する調査を行った。コペンハーゲンのJan Gehl教授が提唱した12項目にわたる3段階の評価法を用いてそれぞれのパブリックスペースを評価し、各都市のパブリックスペースデザインの特徴(文化性、民族性、国際性、デザイン、法律的な規制、施設・設備の平面及び立体配置、管理主体及び方法、特徴的な機能など)について比較した。

16. 「明治期浜松の医者屋敷庭園について」

鈴木里佳(名城大学大学院理工学研究科
博士課程社会環境デザイン工学専攻)

三浦彩子(名城大学理工学部)

内田貞二氏は、江戸時代から続く医家の家系に生まれ、明治時代に、静岡県浜松市新町に内田医院を開業していた。その医院は、第二次世界大戦で焼失し現存しないが、明治中頃の診察所や屋敷内の様子

は、『静岡県明治銅版画風景集』に掲載された、銅版画から推察することできる。また、内田貞二氏が長年書き記した『明治年中雜録』が残されており、これには内田家庭園の築庭工程や、植木の仕入先が詳細に記述されている。本論文は、これらの史料に基づき築庭工程を明らかにし、明治中頃における浜松城下町周辺の私邸庭園の生産体系について考察するものである。

17. 平家の庭園

飛田範夫（長岡造形大学）

京都六波羅に平氏が邸宅を構えたのは、清盛の祖父の平正盛の時代からだ。平治の乱（1159年）後に清盛は、西八条第を造営するとともに、六波羅第を東南に拡張している。その後、清盛は福原（神戸市）に都を造営し、治承4年（1180）に安徳天皇を奉じて遷都した。庭園が存在していたことが文献から明確なのは、六波羅では清盛の泉殿と弟平頼盛の池殿だった。清盛は西八条第では「蓬の壺」をつくっているが、江戸時代には園池跡も残っていたというから、園池も設けていたらしい。遷都した福原京では、清盛は山田の山荘（神戸市垂水区）に庭園をつくっているが、近年の発掘調査では福原京の中心域で園池跡が発見されている。

ポスター発表

1. 家庭でつくる「緑のカーテン」に適する植物の選定

足立健一郎（グリーンテクノ積和株式会社）

藤原宣夫（岐阜県立国際園芸アカデミー）

相田明（岐阜県立国際園芸アカデミー）

一般家庭で「緑のカーテン」を普及するための基礎的な知見を得ることを目的として、花や実を楽しむなどの付加価値を有する6種のつる植物（トケイソウ・セイヨウアサガオ・ゴーヤ・イセイモ・ヘチマ・ヒョウタン）を用いて「緑のカーテン」の育成実験と採涼効果の測定を実施した。採涼効果は、気温、ミスナールの体感温度、WBGT指数（湿球黒球温度）、表面温度を用いて評価し、「緑のカーテン」の表裏での比較、対照としたヨシズとの比較から、植物の被覆によりその効果が大きくなることを明らかにした。また、採涼効果、生育特性、付加価値の

総合的観点から、一般家庭での「緑のカーテン」への使用に適する植物の選定を試みた。

2. 長野県辰野町川島における防風生垣の立地特性と残存状況

初山佳世・上原三知・佐々木邦博

（信州大学農学部森林科学科）

長野県辰野町を含む伊那谷と呼ばれる地域は、アルプス山脈に囲まれた谷地形で、重吹除や防風林など風に関する景観が多くみられる。都市化や建物の高断熱・高気密化に伴い、このような防風のために形成された独特の景観が消えつつあるなか、長野県辰野町川島は、未だ多くの防風生垣が残されている貴重な地域である。そこで本研究では、風に関する景観の中でも特に珍しい、屋根型に刈り込まれた防風生垣を対象とし、その実態を明らかにすることを目的とする。なお、防風生垣の分布や特徴を現地踏査で、住民の防風生垣に対する意識などを聞き取りによって調査する。

3. 動物園における説明板の効果的なあり方の基礎的考察

芝原暁子・上原三知・佐々木邦博

（信州大学農学部森林科学科）

従来の日本の動物園は、レクリエーション施設としての性格が強く、近年ではより学べる動物園を目指した再生が行われ始めている。本研究では、動物の情報来園者に提供する説明板に着目し、説明板の色や大きさ、形などの要素のうち、来園者の関心を引くために重要な要素を探る。そこからよりメッセージ伝達の機能が高い説明板を考察することで、学ぶ場としての動物園での説明板の在り方を考えることを目的とする。調査地は、様々な様式の説明板が混在する須坂市動物園と、説明板の様式が一樣な飯田市立動物園の2か所を比較対象として選定し、来園者の動態調査を行う。

4. オープン外構による開放的な前庭が連続する戸建住宅地と街並みに関する意識調査

寺島和希・上原三知・佐々木邦博

（信州大学農学部森林科学科）

「四季の杜」は近年住宅地開発が進む長野県長野市の戸建住宅地である。緑化活動に積極的であり、

隣地との境に植栽を用いるオープン外構により連続した緑豊かで開放的な街並みを構成している。このような住宅地が増える中で、住宅地内の緑地が景観に対して大きな意味を持ち始めている。そこで本研究では「四季の杜」を対象とし、実態調査を実施し初期の植栽や建築物の制限の違いからタイプ別に比較を行う。その上で、アンケート調査を実施し住民の緑地や景観に対する意識を明らかにするとともに、今後どのような住宅地が求められているかを考察することを目的とする。

5. 小学校における児童の休憩時間の屋外活動と校庭デザインの関係性の基礎的考察

馬芋芋・上原三知・佐々木邦博
(信州大学農学部森林科学科)

小学校の休憩時間、屋外施設を利用して遊ぶ児童の姿がよく見られている。特に、近年、ピオトープなどが設置されている新しい小学校は増えてきた。しかし、そのような新しく設置された施設があっても、現在の児童達は様々な原因で外に出たくない傾向があると見られている。そのため、児童はどのような屋外施設を求めているのかだけを追究するのではなく、校庭デザインなどの要因も考えなければならぬ。そこで本研究は、デザインが新しい校庭の児童を対象に、早朝、昼休み、放課後の三つの時間帯で活動範囲の実態調査の結果と、デザインが古い校庭の児童活動範囲と比べ、屋外活動と校庭デザインの関係性を明らかにすることを目的とする。

6. 老人福祉施設において施設外でのレクリエーション活動が入居者や介護職員にもたらす効果の基礎的考察

細川智博・上原三知・佐々木邦博
(信州大学農学部森林科学科)

現在日本は本格的な少子高齢の問題に直面しており、長くなった高齢期を健全に、生きがいをもって過ごす事が求められている。また、近年園芸療法などの緑と関わる活動と癒し効果との関係性が注目されてきている。そこで本研究では、アミラーゼ値の測定により、高齢者がどのような緑の活動によってストレスが軽減したか、また、POMSテストの実施により、そのときの介護職員の気分の変化を明らかにしていく。対象地は緑が豊かな長野県内の老人福

祉施設とし、その中でも年間を通してレクリエーション活動が盛んな「特別養護老人ホーム サンハート美和」を対象として、調査を進めている。

7. 飯田市街地に存在する3つの緑地に対する地域住民の評価の世代間での違いについての考察

益田大嗣・上原三知・佐々木邦博
(信州大学農学部森林科学科)

長野県飯田市に存在する3つの緑地、中央公園・リング並木・桜並木は、昭和22年に発生した飯田の大火からの復興都市計画でできた防火街路の中央に造られたものである。現在、これらの緑地は飯田市のシンボルとして親しまれている。本研究では市のシンボルとして市民に親しまれている緑地に対する地域住民による評価の世代間の違いを明らかにすることを目的とする。それぞれの緑地ができた歴史、現在の利用状況及び管理状況について調査し、また、地域住民を対象に、緑地に対する評価を調査し、世代間で比較する。この研究で、市民に親しまれる共有緑地のあり方についての提案をしたいと考えている。

8. 城址公園における周辺住民と観光客との利用の相違

中村由佳・上原三知・佐々木邦博
(信州大学農学部森林科学科)

城址公園は遺構の保存を行うと共に、それを広く一般に公開して歴史に親しむ場とすることを目的とした公園である。しかしそれだけではなく、周辺住民の日常的な利用も行われている。これまで城址公園では、遺構の保存を図りつつ歴史学習の場や余暇活動の場としての施設整備が行われ、さらには地域のランドマークとしての整備も行われてきた。各地の城址公園でこのような整備が進められてきたが、現在は整備後の活用と運営が課題となっている。そこで本研究では、城址公園の利用者に対してアンケート調査を行い、周辺住民と観光客との公園利用の違いから城址公園の利用実態を明らかにし、今後の活用と運営の参考としていきたい。

9. 長野市松代町における武家屋敷庭園及び町並みの評価と地域イメージの関連性についての考察

兼井聖太・上原三知・佐々木邦博

(信州大学農学部森林科学科)

長野市松代町は、真田藩の城下町として発展し、現在でも町割りや町並みの多くが当時のままで残されている。また特に泉水路、セギ、カワに分類される水路網が多く残されている点は、全国でも松代町にしか見られない特徴である。そこで本研究では「お庭拝見」という個人の庭を公開する企画と「路地をめぐる」という企画を対象とし、それぞれの参加者に対してアンケート調査を行う。アンケートでは武家屋敷庭園や町並みの評価と松代町の地域イメージについて調査し、それらの関連性や参加者の属性、参加回数の違いによる評価の差異を把握することを目的として分析を行う。

10. 国営アルプスあづみの公園における堀金・穂高地区と大町松川地区の利用実態の相違について

竹村大志・上原三知・佐々木邦博
(信州大学農学部森林科学科)

国営アルプスあづみの公園は長野県にある国営公園であり、堀金・穂高地区と大町・松川地区の離れた2つの地区からなっている。平成16年に堀金・穂高地区が開園し、一部のみの開園にも関わらず県内外から多くの利用者が訪れ、来園者数は年々増加傾向にある。また、本年7月には大町・松川地区も開園し、両地区が開園した。それに伴い、今後両地区を活かすために各地区の特性の正確な把握と、来園者のニーズとの関連性を分析する必要がある。そこで、本研究は両地区の来園者を対象にアンケート調査を行い、利用実態を明らかにし、利用者の多様なニーズと満足度を探ることを目的とする。

11. 中山間地域の里地・里山の有用植物の認知とその世代間伝承に関する基礎的考察

上原三知 (信州大学農学部)

里地・里山の有用植物の認知とその世代間伝承について、植物の写真と、イメージマップを用いた面接調査を実施した。また、行動範囲の記録から、記憶されている有用植物の効用(用途)・分布環境を確認した。薬草としての認知は26種/117種、食用としての認知は9種/117種となり、それらの有用植物群を含む20種/117種が減少したと認知されていた。認知植物種数は祖父>息子>母で多くなったが、自生場所を含めた認知度は祖父>祖母>息子となり、

イメージマップ(圏域図示法)からも自らの採取、栽培の体験がない世代では地区内の有用植物の自生環境(場所)に関する知識が乏しいことが確認できた。

12. 上高地における観光客の滞在時間の変化と滞在の評価に関する基礎的考察

柚木真・上原三知・佐々木邦博
(信州大学農学部森林科学科)

中部山岳国立公園内の上高地は、年間150万人を超える観光客が訪れる日本でも有数の観光地である。一時期は行楽シーズンの大渋滞が問題となっていたが、現在はマイカー規制や安房トンネル、新釜トンネル開通などによってスムーズに訪れられるように改善されてきている。しかし、滞在時間の短縮化や宿泊者数の減少などの悪影響ももたらしている。そこで、本研究では、上高地に訪れた観光客を対象にアンケート調査を行い、過去に上高地で行われた調査の結果と比較を行い、滞在時間の変化を明らかにする。また、仮想評価法を用いて滞在の評価についても明らかにする。

口頭発表

1. 近江八景小考 (第15報)

一 八景型・変化型・名所型一

田中誠雄

国立環境研究所の「八景の分布と最近の研究動向」-過去の景観評価データの表8.1全国の八景(p.108-p.145)より、設定年の明らかな八景は926カ所である。八景には三つの型があり、一 瀟相八景型-瀟相八景の季語(落雁・帰帆・晴嵐・夕照・晚鐘・秋月・暮雪・夜雨)をそのまま地名につけるもの(以下、八景型とする)と、二 八景変化型-瀟相八景の季語以外の季語やよく似た季語を使い、季語的な見方をしているもの(以下、変化型とする)と、三 名所型-地名や具体物が8カ所で季語がないものである。八景型は明治・大正・昭和・平成と急減し、変化型は明治・大正と下降し昭和で増加し、名所型は昭和に急増している。

2. 江戸時代の造園書に記述される庭園の「眺望」について

李 偉 (国際日本文化研究センター)

本発表は、江戸時代の造園書に記された庭園の眺望景観およびその手法に関する記述を考察することによって、江戸時代の庭園における眺望景観の特徴を明らかにしていく。造園書の中でもとりわけ『露地聴書』、『古今茶道全書』(第五卷)(1694)、『築山庭造傳』前編(1735)や『築山庭造傳』後編(1828)を考察対象とする。これらの考察を通じて、二つの結論が導かれた。第一に、眺望は単なる高い場所から遠景を觀賞するのではなく、園内景観に遠景を調和させるような景観操作が施されていたのである。第二に、眺望は庭園の至るところではなく、建物の内部あるいは眺望が目的とする亭や楼などで行われ、工夫されていたのである。

3. 頼山陽の『涉成園記』にみる「涉成園十三景」の情景分析

加藤友規 (京都造形芸術大学)

涉成園は、東本願寺の別邸で通称「枳殻邸(きこくてい)」の名で知られる。明暦3年(1657)、第13代宗宣如上人の隠棲の地として整備したのに始まり、昭和11年には国の名勝に指定されている。この

庭園では「涉成園十三景」が世に普及している。これは江戸後期の儒学者で漢詩人でもある頼山陽が文政10年(1827)に『涉成園記』を撰して「涉成園十三景」を紹介し、高い評価がなされているからにはほかならない。本稿では、『涉成園記』に基づく山陽の十三景を巡る回遊経路及びその情景描写に注目した。特に、臥龍堂の鐘を合図に漱枕居から舟で喫茶の場に向かう光景には文人煎茶の風情が漂い、近世日本庭園の空間的特質のひとつが読み取れることは興味深い。

4. 藤原道長の桂遊覧にみる山里

高橋知奈津 (奈良文化財研究所)

平安時代になって和歌や物語において登場した「山里」と呼ばれる都の郊外の山麓を指す空間が、平安前期には、もの寂しくわびしい山奥の地であったが、中期には閑寂な好ましい美的世界へと変化した。本発表では、その一要因として、山里において盛んに行われるようになった、貴族の別業造営と郊外遊覧を想定し、当時の代表的な貴族である藤原道長に焦点を当て、桂山荘を中心にその実態を明らかにする。道長が摂政へと上りつめるまでの期間に、桂山荘を拠点とした遊覧を行っている。山里の魅力を生かして積極的に演出し、公卿たちと共に君子の交わりを実現することにより、結束を高めたものと考えられる。

5. 『庭造図絵秘伝』にみられる鈍穴の石組構成に関する研究

村上修一 (滋賀県立大学)

本研究の目的は、鈍穴こと勝元宗益(1810-1889年)が作庭書に描いた絵図にもとづき、彼が理想とした石組の構成について考察することである。具体的には、『庭造図絵秘伝』(1879年)に描かれた石組のうち、三尊石を中心とする21組を対象に、石の形、傾き、位置および間隔について、絵図上の相対スケールで分析した。その結果、縦長の三尊石と横長の蓮華石や盤石との間の配置上の特徴が浮上した。このことより、鈍穴は垂直性と水平性の対比を創り出す石組の構成を理想としたと考えられる。

6. "空間装飾物と装飾対象空間の変遷について

一 建築空間と庭園空間に対する装飾行為から一

町田 香（国際日本文化研究センター）

空間（建築・庭園）に対する装飾物の変遷と、装飾の対象となる空間のあり方を考察した。古代、寝殿造のように建築と庭園が連続した空間では、室内・屋外の区別なく装飾が施された。装飾物の一つに州浜のように珍宝などで山水を表現した一回性の自然景物があり、中世には、書院造のように建築と庭園との空間分節が始まり、室内装飾物が自然景物から、所有・保管を前提とする人工物（唐物）へと変化した。近世になると、室内の装飾物が屋外に侵入し、例えば庭園がマネキンのような人工物で装飾されるようになる。近代には屋外の庭園を構成する木や石などの自然そのものが擬木・擬石のような人工物に代わる。

7.大正期における東京帝国大学理科大学附属植物園日光分園跡地の風致について

西村公宏（茨城県南県民センター）

東京帝国大学理科大学附属植物園日光分園跡地は、大正2(1913)年、日光東照宮により買い戻され、三百年祭記念神苑の設計が本多静六により進められる。本多の案は、自動車道路を重視し、石垣等を含む既存の区画を大幅に改変するものであった。この案に反対を唱えたのが白井光太郎で、本多の案では深山の趣を破壊してしまうと主張し、山内の石垣に生える植物の保護についてもふれていた。神苑の計画は経費等の都合により途中で打ち切られるが、白井の植物保護に関する主張は、日光東照宮が大正14(1925)年に著した『日光東照宮百話』において紹介されている。日光特有の植物が生える石垣は、新たな風致として認識されていたのである。

8.近代大阪・阪神間を中心とした擬石・擬木の導入と展開

粟野 隆（奈良文化財研究所）

本稿では、近代大阪や阪神間における造園空間への擬石・擬木の導入経緯と造園的利用の展開について整理することを目的とした。擬石・擬木の導入は大正末期であり、椎原兵一（大阪市公園課長）、橋本八重三（橋本庭園工務所）、小林観山（小林六合園）という3人の造園家・造園技術者がその大きな担い手であった。昭和初期に至り、椎原が設計し、橋本や小林が施工した、擬石・擬木を利用した庭

園・公園が多数つくられ、造園資材として本格的な利用展開をみた。なお、昭和10年代には、擬木製作を専門とした大島角太郎（臨南園）という人物が存在した点も注目される。

9.寧夏回族自治区の小中学校の環境 ―その1―

狩野忠正（大阪芸術大学）

中国のほぼ中央に位置する、寧夏回族自治区の小中学校の交流教育支援に参加した。日本からの参加人数は15名であった。参加した小中学校の先生方は学生との面談が主な業務であったが、私は小中学校に建築のワークショップを行う事と、小中学校周辺の環境を調べることにあった。学校周辺は砂漠であり、水辺と緑は少ない。通学のための距離は遠く、ほとんどの学生は寄宿舎で生活している。両親はさらに離れたところで仕事を行っている。建築配置は対称形である。四合院の配置方式である。日本での建築は機能主義であるのに対して、中国では配置が優先し機能はその後に決められる。建築は教室、食堂、宿舎、倉庫、どう使われるかは2の次である。

10.リバプール市カルダーストーンパーク日本庭園の維持管理

福原成雄（大阪芸術大学）

リバプール市カルダーストーンパーク日本庭園は、イギリス人によって約40年前に作庭され、市民の憩いの場として長く親しまれて来た。作庭に関わった人々が退職され、庭園の維持管理が行われなくなり、荒れ果てた状態となり、ジャパソサエティー北西支部、ジャパニーズガーデンソサエティー、カルダーストーンパーク友の会が中心となって維持管理を行うことになった。その取組みを紹介する。

11.京都における庭園の剪定管理技術に関する一考察

山田拓広（京都造形芸術大学）

日本庭園には意匠、資材、技術など様々な要素が関わるが、特に日々成長する植物の管理技術は庭園景観を大きく左右する。剪定作業は樹木の性質、生育環境により時期や作業内容は異なるが、京都で行われている剪定技術とはどのようなものなのか、「透かし」技術にちがいはあるのか、作業を行う上での考え方などを技術者からの聞き取り記録をもとに検討した。結果として樹木の形を美しく維持する

こと、そのために樹木の健全な育成も考慮して作業が行われていることがわかった。庭園空間の状況により、庭園素材を活かす方法が取られ、その空間パターンが京都の剪定技術が類別されて見られたと考えられる。自然に重きを置いた作業は伝統であるとともに、技術者の生活の中に生きる京都の文化風土の影響も大きいと考えられる。

12. 横浜市よこはま動物園ズーラシア「チンパンジーの森」の設計・施工

若生謙二（大阪芸術大学）

2009年4月によこはま動物園ズーラシアにオープンした「チンパンジーの森」の設計の考え方と施工のプロセスを紹介する。アフリカの森林に生息する大型類人猿のチンパンジーは、展示下では植物を食し痛めるため、野生動物の生息環境を再現する生息環境展示は困難であるとされ、鉄塔などの人工的環境で展示されてきた。これに対し、本展時では、果実や樹葉を食する樹上性の生息環境を再現するために、園内にある樹高10数mのエノキ、ムクノキ、アラカシなどの高木を移植し、また擬木、電気柵と併用することで、樹上性環境の再現と緑蔭の確保を図った。また、施工時には、生息地であるウガンダへの現地調査を行い、その情報をもとに休息する擬木の枝形状を決定するなど、自然主義的ランドスケープとしての生息環境展示を行った。

13. 文化的景観を継承するための住民意識

恵谷浩子（奈良文化財研究所）

文化的景観を継承、または形成する条件が変化した今日、その景観を保全・形成していくためには、まず、その景観を形成している地域住民の意識を向上していくことが重要である。そこで本研究では、40年にわたって景観形成と住民意識向上を行ってきた山形県金山町と、景観に関する取り組みを行っていない石川県輪島市三井町を対象とし、アンケート調査によって住民意識の差異を構造的に把握した。その結果、景観を形成する、または保全する行動には「政策への価値観一致」と地域の在り方に対する「道徳的な義務感」が大きく影響していることが示された。

14. 神戸市の神社における農村舞台の存廃状況に関す

る研究

平野裕二郎・大野朋子・上甫木昭春（大阪府立大学）

農村舞台は芸能を行う常設の建造物で、多くが神社に付随しコミュニティの中心であったが減少傾向にある。本研究では神戸市の神社における農村舞台の存廃状況を把握することを目的とした。対象地は神戸市の全神社310社で、その内43社にアンケート・ヒアリングを行った。その結果、舞台は20社現存、23社廃絶であった。芸能利用は歌舞伎・能・人形浄瑠璃などがあったが、多くは廃絶し、平成期に5社で復活した。農村舞台は神戸市北区・西区特有の文化であり、存続し利用されることでコミュニティにも寄与すると思われる。今後は舞台存続や芸能復活のための体制の構築や、文化財や神社がもつ精神性への理解を深める必要がある。

15. 商業的に活用されている京町家における前栽と坪庭の実態と役割

下村 孝・草間香織（京都府立大学）

"京都の伝統的住居である町家を新たに商業利用している町家で前栽や坪庭の利用実態を探り、営業や顧客の心理などに及ぼす影響と役割を探った。事前調査として、京都市内で営業中の町家を訪問し、坪庭および前栽の存在を確認した店舗で実態を聞き取り調査するとともに、150軒弱にアンケートを配布して、約50%を回収した。前栽、坪庭ともに、従前通りの姿で残している店舗に比べ、回収して利用している店舗の比率が高かった。前栽や坪庭はマスクミなどに取り上げられるなどの側面から営業成績を向上させると評価されていた。また、顧客や従業員に安らぎを与えているとの評価も得られた。得られた調査結果から、今後のあり方を考察した。"

16. 伴侶動物の有毒植物中毒事故からみる都市公園における有毒植物分布に関する研究

藤井勇気・山田宏之（和歌山大学）

ペットの有毒植物中毒事故が報告されている。伴侶動物やコンパニオンアニマルと言われるように、人とペットとの関係性が親密化してきている中で、動物に配慮した植栽を考えることも重要である。本研究では、有毒植物が引き起こす伴侶動物への中毒事故原因の現状分析と将来対策を目的とし、散歩利用として多い公園内の有毒植物分布状況と公園利用

状況を調査した。その結果22公園中17公園に有毒植物が存在し、うち約72%が致死性の植物種であった。また、38%が園芸活動により植えられていた。和歌山市での中毒事故報告はなかったが、十分な統計資料が無く、植栽には犬の中毒に関する配慮が無い現状であった。

17. 大阪市阿倍野区の街区公園を事例とした行為規制に関する研究

竹村大河・下村泰彦・加我宏之・増田 昇
(大阪府立大学)

本研究では、大阪市阿倍野区の19箇所の街区公園を対象として、公園内での禁止看板に着目して行為規制のあり方を考察した。まず、現地調査および行政の公園管理者である大阪市南部方面公園事務所へのヒアリング調査により禁止看板の設置状況を探った。次いで4公園を抽出し、アンケート調査およびヒアリング調査を通じて利用者と公園愛護会会長の禁止項目の認識度、禁止行為を見かける頻度、行為規制に対する意識を捉えた。その結果、禁止看板は氾濫している状況にあるが、行為が抑制されるといった効果はほとんど発揮されないことが分かった。また、禁止項目の中には一般利用者が公園内の行為として容認しているものも多数認められた。

18. 昭和40年代の京都市におけるあそびを支えるオープンスペースに関する研究～下京区植柳学区を事例として～

三橋 渉・下村泰彦・加我宏之・増田 昇
(大阪府立大学)

京都市中心市街地は町家が立ち並ぶ都市公園の少ない地域であり、地域の様々なオープンスペースが子どものあそびにとって重要な役割を果たしている。本研究ではあそびの原風景が残っていたとされる昭和40年代から現在の環境の変化とヒアリング調査による昭和40年代のあそびとあそび環境との関係から、あそびを支えるオープンスペースの今後のあり方を探った。結果、寺院の境内、道路・路地スペースがあそびの多様性にとって貴重なオープンスペースであったことが明らかとなった。今後、ますます、敷地の統合化に伴う路地の減少や交通量の増加に伴う道路でのあそびの制限が予想されることから、これらを補完するオープンスペースの確保が課

題となる。

19. 兵庫県における淡路花博後の花緑イベント開催の成果と今後の取り組み

橘 俊光 (兵庫県県土整備部)

兵庫県では、平成12年開催の「淡路花博」の理念、成果等を踏まえ、ポスト淡路花博として「ひょうごフローラフェスタ」を平成13年度から平成20年度まで県下各地域持ち回りで実施した。県下を一巡し、各地域の多くの県民への花緑にふれあえる機会を提供できたことなどの成果とともに、より効果的な実施手法・体制等が課題であった。淡路花博10周年等となる平成22年春、淡路夢舞台、国営明石海峡公園(淡路地区)等で開催予定の「淡路花博2010 花みどりフェア」は、「ひょうごフローラフェスタ」の実績等の延長線上にあると考えられるが、人と自然の協働、継承・発展という理念に新しい視点が見られ、多彩な展示・催事等が予定され成功が期待される。

20. ウマスギゴケのターフ上面における水分挙動からみるコケ庭の微気候保全

飯田義彦・今西純一・大石善隆・森本幸裕
(京都大学)

日本庭園のコケ庭に用いられるウマスギゴケ群落にとって景観形成要因として日々の大気状態が重要であるが、生育に必要な葉面での水分供給が日々の大気状態とどのように関わっているかはこれまで定量的に検討されていない。本研究でターフ上面の水分量を実測し、群落における微気象観測を行った結果、仮根系や茎における降水の吸水によりターフ内湿度が維持され、降水後の夜間晴天静穏による放射冷却により葉面に凝結水が生じることが推察された。これらの一連のながれを「降水-蒸留過程」と呼び、この過程を効果的に発揮させるために水平方向及び鉛直方向の気象学的コミュニケーションを調整するコケ庭の微気候保全の必要性を指摘した。

21. 多自然居住地域におけるGPS搭載携帯電話・WEB-GIS連携システムを用いた生活文化情報の収集と活用

嶽山洋志 (兵庫県立大学)
山下義弘 (榊アークス)

中瀬 勲 (兵庫県立大学)

本研究では、多自然居住地域における生活文化情報の収集と活用に、GPS搭載携帯電話とWEB-GISを用いた際の効果について検証を行った。その結果、3日間で174の情報が集めることができ、本システムが地域資源の消失が差し迫る多自然居住地域での情報収集ツールとして有効であることが確認できた。また製塩活動や洗い場の活用など竹野らしい生活の知恵や、竹野浜に打ち上げられるワカメなど地元の方々しか知らない穴場といった生活文化情報を収集でき、移住希望者に対する事前の地域理解のための情報支援ツールとしても有効であることが伺えた。

22. ケーススタディハウスにおける内外の連続性を創出する手法としての線状エレメントの分析

齊藤 雄 (大西賢(株))

實方華子・武田史朗 (立命館大学)

ケーススタディハウスは、プログラム全体を通じて、南カリフォルニアの一年中温暖な気候に対し、内部と外部の連続性を重視することが条件とされた一連の実験住宅であるが、連続性を実現するための具体的な手法について、内部空間と外部空間の双方にまたがる分析を通して明らかにした研究はこれまでにない。本研究では、35のプロジェクトから、際立って観察される内外にまたがる壁面や段差などを線状エレメントとして定義、抽出し、その種類、出現頻度の分析、および、構造形式や年代ごとの特徴の比較によって、線状エレメントの各タイプについて、内外の連続性を創出する手法としての定義を明らかにした。

ポスター発表

1. 何有荘庭園における歴史の変遷と復元的考察

加藤友規 (京都造形芸術大学)

何有荘は旧南禅寺境内に位置し、江戸時代の塔頭跡地に築造されている。明治38年(1905)に稲畑勝太郎の所有となり、「和楽庵」と称した。本研究では、資料の収集と分析を通じて、何有荘の歴史の変遷を整理し、時代区分による庭園の特徴が明らかにした。何有荘の歴史において、「和楽園記」(大正9年5月)

の時期を第二期の中でも特に「黄金期」と位置付け、その完成度を評価した。まさに、今日の何有荘庭園の骨格となる情景が「和楽園記」に記載されていることから、「和楽園記」を詳細に分析し、復元図を作成して「黄金期」の庭園の復元的考察を試みた。その結果、「黄金期」の和楽庵と今日の何有荘との差異や特徴が明らかになった。

2. 頼山陽の『涉成園記』にみる「涉成園十三景」

加藤友規 (京都造形芸術大学)

「涉成園は、東本願寺の別邸で通称「枳殻邸(きこくてい)」の名で知られる。東本願寺の東方200mに位置し、面積は約35,200㎡。明暦3年(1657)、第13代宗主宣如上人の隠棲の地として整備したのに始まり、昭和11年には国の名勝に指定されている。この庭園では「涉成園十三景」が世に普及している。これは江戸時代後期の儒学者で漢詩人でもある頼山陽が文政10年(1827)に『涉成園記』を撰して「涉成園十三景」を紹介し、高い評価がなされているからにはほかならない。本ポスターでは、『涉成園記』の原文と現代語訳を表示するとともに、『涉成園記』にみる頼山陽の推定回遊経路図を作成し、十三景の順番ごとに①～⑬の番号を付して、現在の十三景の情景を表示する。”

3. 国際宇宙ステーションでの長期滞在に向けた植物ユニット「宇宙庭」の提案

小田龍聖 (京都大学)

松井紫朗 (京都市立芸術大学)

森本幸裕 (京都大学)

国際宇宙ステーション(ISS)の発展に伴い、宇宙飛行士の長期滞在が本格化しつつある。人工的な閉鎖環境においては、自然との交流が精神的支えとして重要視され、植物を用いた交流手段として、松井による「宇宙庭」プロジェクトが推進されてきた。一方で、植物との触れ合いは内部環境の汚染源となる危険性も含み持っている。本研究では、この2点を両立させるべく、ISSの安全基準、環境条件を明らかにし、その条件に適合する植物の栽培手法、及び植物種を提案した。今回の発表では栽培方法、造園学的意義に焦点をあてている。現在H21年09月11日の種子島からの打ち上げで、提案したユニットがISSに無事に搭載されることとなった。

4.南あわじ市広田地区活性化案

秋岡佑輔・芦田博貴
兼村星志・神谷亜依・崎須賀章子・高島基郎
高橋美和・田中洋次・南部恭宏・林ひろみ
林まゆみ（兵庫県立大学・淡路景観園芸学校）

"兵庫県の淡路島に位置する南あわじ市広田地区は第1次産業である農業を主とする世帯が多く、農村地域としての活性化が期待されている。さらに広田地区には、新規就農者を受け入れている農家や、農村交流を目的とするNPOなど多彩な人的資源もある。本研究では、それらの人的資源や美しい景観等を原資とし、且つ多様な角度から農村地域の活性化案を提供し、地域との交流を図った結果をまとめたものである。それらの提案は、ハード面からは拠点施設、アート空間、学習拠点など、ソフト面からは情報発信に関連するツールや産業活性化に関する提案、またイベント面からは祭りや催し、観察会などに関する提案、というように多様な観点からまとめられている。"

5.国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区の基本設計(案)に関する景観検討(評価)

山地孝之・伊崎憲昭（株景観設計研究所）

本作業は、当該事業を明日香村の歴史的風土にふさわしい景観の保全、公園内外一体の景観形成に結びつけることを目的に、「景観調査の実施～評価体制の構築～景観整備方針の策定～基本設計(案)に関する景観の予測・評価」を一連の流れとして実施した。中でも、景観評価の柱となる景観整備方針の策定では、その一環として「12の景観デザイン原則」を設定した。この原則は、高松塚周辺+甘檜丘の概成2地区での住民・来訪者等の写真撮影による景観調査、被験者ヒアリング等による景観魅力の分析等を通じて抽出された客観的評価景観を、具体化させたものである。予測景観の評価は、このデザイン原則に基づいて行い、その結果を再び基本設計(案)へ反映させた。本報告では、この流れ・方法を景観検討(評価)の一つの手法として紹介する。

6.遊具のリスクマネジメントにおける当社の取り組み

永井英樹・中橋文夫（環境設計(株)）

当社は、平成17年度から財団法人大阪府公園協会

発注の「遊具事故ゼロ計画推進業務」を受け、「情報管理」、「品質管理」、「利用管理」の3つの柱からなる総合的な遊具リスクマネジメントに取り組んできた。その実績を活かして、平成20年度には、大阪府営公園の大泉緑地にある冒険ランド内の大型木製複合遊具の計画、設計を行い、施工監理までを遂行した。今年度においては、遊具の効率的な管理を実現、実証するためのQRコードを利用した遊具点検管理システム（遊具点検Webアプリ）を自社開発した。

口頭発表

1. 福岡県黒木町笠原における地域景観の保全に資する茶畑の活用の可能性の検討

レイエス ハイロ・北原憲太郎

(九州大学大学院芸術工学府)

包清博之 (九州大学大学院芸術工学研究院)

福岡県下の中山間地域の一つである黒木町笠原地区では、茶畑が地域の景観形成に大きく影響している。茶畑は生業だけでなく、地域の人々の日常生活文化の形成に重要な役割を補う要素であり、特徴ある笠原地区の景観形成に寄与している。しかし、笠原地区の茶畑は景観形成への寄与の可能性とは係わりなく経営されている。景観計画の視点から茶畑の活用条件を把握することは、茶畑を基調とした地域固有の景観の保全を図る上で重要であると考えた。そこで本調査では、地域景観の保全に資する茶畑の活用の可能性について検討することを目的とし、笠原地区に存在する茶畑の地理的条件の把握と、人々が景観を認識できる条件を把握した。

2. 地域景観の保全に資する竹および竹林の活用目的に関する考察

栗田融 (九州大学大学院芸術工学府)

包清博之 (九州大学大学院芸術工学研究院)

竹類は、かつて有用資源として多用途に活用されてきた。しかし、近年では国産竹の需要は低下し、放置竹林の増加が見られるようになってきた。その結果、竹林内の荒廃や侵入竹による隣接地への影響など、農山村地域における地域景観の悪化が顕在化してきている。そこで本研究では、地域景観を計画的に保全するための竹林活用の可能性を、地域住民による利用の視点から探求することを目的とした。具体的には、全国有数の竹林を抱える大分県を対象とし、県内の公立小・中学校の教員および市民活動団体へのアンケート調査を基に、これから取り組む際の竹の活用目的を把握し、地域住民の利用からみた竹の活用目的と地域特性との関係を考察した。

3. 中国、青島市における里院及び里院街区の保全に関する調査

方民 (中国・山東工芸美術学院)

包清博之 (九州大学大学院芸術工学研究院)

里院は中国の青島市にみられる住宅形式であり、ドイツの租借地 (1898-1914年) となった時から建てられはじめた中国人の住宅である。本研究では、里院及び里院街区の景観保全に関する知見を得ることを目的とした。里院は中国の伝統的な四合院 (旧式の家) の空間の組み合わせに西洋建築技術が加わり、青島市独特の家屋として生まれた。里院及び里院街区を対象に、資料調査し、現地調査を通じて、里院及び里院街区の空間的特徴を把握した。また、人々の視点からみた里院及び里院街区の景観保全のためのアンケート調査を実施した。本調査から、里院地区は青島市における地域特性を有している住宅形式であり、歴史文化遺産が有する特徴を多く人が認識していることがわかった。しかし、現在の里院及び里院街区の保全を図るためには、外観の維持だけでなく、居住機能の改善が必要であることが示唆された。また、居住者の特徴は里院が成立した頃とは著しく異なっていることがわかった。

4. 地方中核都市の大規模住宅地における空区画の用途と分布形態の関係

永山一樹 (長崎大学大学院生産科学研究科)

渡辺貴史 (長崎大学環境科学部環境科学科)

本研究は、地方中核都市の大規模住宅地における空区画の用途と分布形態の関係を明らかにした。主な成果は以下のとおり。(1)全街区面積に占める空区画の割合は、16.8%であった。空区画の用途は、未利用地、駐車場、菜園であった。(2)街区は、空区画率、混在度、擁壁率、街区面積という4つの指標を用いたクラスタ分析から5つに分類された。(3)空区画の用途が未利用地である割合は、空区画率の高い街区において高くなった。(4)(2)で求めた街区の分類と建ぺい地みの街区の構成比率を用いたクラスタ分析を行い、住宅地を3つに分類した。これらの結果を基に、大規模住宅地における空区画の管理運営方針を検討した。

5. ドイツ・北欧における「森の幼稚園」の普及条件を通じた子ども環境の考察

佐藤俊太郎・岡島直方・北川義男

(南九州大学環境造園学部造園学科)

子どもの発達には「原体験」を重ねることが欠かせない。現在、原体験の重要な要素である自然体験

と野外体験を含む多様な遊びやその環境が貧困化している。ドイツ・北欧では「森の幼稚園」という自然環境を利用した野外保育システムが確立されている。森の幼稚園の普及は、ドイツ・北欧の文化・生活の根底としての森の存在、過去の環境破壊から生まれた高い環境意識、国土・気候的な好条件、明確な都市開発による都市近郊林の確保によって支えられている。この取り組みにより、経済発展と子どもを取り巻く環境の保障は、両立が可能である。国土における自然が乏しくても、取り組み次第で十分に補える。ドイツ・北欧以上の豊かな自然を国土に有する、日本における可能性が示された。

6. 中等教育施設の校庭に求められる計画・設計課題に関する検討

北原憲太郎・岡本慎太郎・宮原敏樹・坂口真崇
レイエス ハイロ (九州大学大学院芸術工学府)
包清博之 (九州大学大学院芸術工学研究院)
竹下俊史・林田実 (宗像市教育委員会)

都市及び近郊における中等教育施設の多くは、高度経済成長期以降の急激な人口の集中にともなう、都心部及び郊外の市街地に数多く設置されてきた。近年、このような中等教育施設についても、少子高齢化にともなう人口構造の変化や施設の老朽化の進行の中で、建て替え等が社会的に求められるようになってきた。しかし、中等教育の充実等を前提に、校舎や校庭の役割や地域社会との繋がりを一体的に計画・設計するための計画条件などに関する資料や研究事例は殆どみられない。そこで本検討では、1970年代に設置された福岡県宗像市立日の里中学校を対象に、校庭の計画・設計のアプローチを試みる中で、計画課題を探ることを目的とした。

7. 住宅庭園景観の計器による色彩測定の有効性について

植田 緑 (南九州大学大学院園芸学専攻)
都市景観づくりの一つに色彩構成を用いた景観条例や景観色彩ガイドラインは建物の外壁に対しての規定であることがほとんどである。今後行われる景観づくりにおいては、建物の外壁だけではなく植物も含めた全体的な色彩構成を行う必要がある。今回の調査では、植物に対する意識の高い宮崎県のオープンガーデン2グループ31軒を対象として、色彩

構成についての調査を行った。計測機器はコンフォトメータを用いて、マンセル表色系・カテゴリアルカラーの色分布・快適指数の3点から計測値の有効性について検証した。

8. ブリュッセル「エラスムスの家」庭園のデザイン原理

平岡直樹 (南九州大学環境園芸学部)

エラスムスの家に付随する菓草園を取り上げ、庭園整備の経緯と設計の意図等を明らかにし、ヨーロッパにおける中世庭園の再生の考え方と手法を検証した。その結果、この菓草園のデザインの参照元は、ディルク・バウツの絵画『オットー皇帝の裁判』、エラスムスの著作『宗教饗宴』、エラスムスが当時の著名な医師達と交わした手紙であると整理できた。また、設計者ペシエルは、独自の手法「直角線と消失線の平均の法則」を適用して、既存の構造物がなす角度の中間線を用いて新たな区画を挿入するという視覚補正の技術を織り込み、歪な敷地と整形庭園の幾何学性の融和を試み、不自然さを感じさせない親密さを演出していることが明らかになった。

9. 英国王立キュー植物園における「日本の伝統的庭園技術を用いた今日的庭園展示」の経緯とその意義

関西剛康 (南九州大学環境園芸学部)

2001年5月25日から9月30日までの4ヵ月余の間、英国で日本文化紹介事業「Japan2001」の一環として王立キュー植物園では、「日本の伝統的庭園技術を用いた今日的庭園展示」と題した6つの展示庭園を一般公開した。本論は、この展示庭園を手掛けた派遣デザイナー6人中の1人として、そのテーマ・デザイン・設計・設計監理から完成に至るまでの経緯を詳細に辿るとともに、その意義について考察を行った。この考察から6人のデザイナーが日本庭園の伝統技術を用いながらも、その庭園様式に固執することなく、英国の環境、生活、文化との調和を考えて、その手法や技法を再構築して新たな提案をしていた。

10. 旧柳河藩主立花家別邸庭園の整備について

國基博・本松進・永松義博
(南九州大学環境造園学部)

柳河城の西南隅、外堀に囲まれた地にはかつて大

名の別邸があり、「御花畠」と呼ばれていた。立花家藩主鑑虎が元禄10年に築いた別荘「集景亭」がその始まりである。立花家に保存されている庭園の古絵図の描写から往時の庭園の様子が明らかになった。2007年から2009年8月にかけて実測調査をおこない、庭園実測図を作成した。実測図を基に庭園復元計画案を提案した。

11.造園屋 チョウを飛ばす！—温室内放チョウの修景効果と話題性—

熊谷芳浩（株式会社西鉄グリーン土木）

公園の維持管理という分野は、近年は指定管理者制度の広がりに伴って、単なる園地管理、植物管理にとどまらない、より利用者に喜ばれる意義のある運営が求められるようになってきている。温室や庭園を擁する施設において、より効果的な展示を考えたときに、放チョウという取り組みがある。これは植物が他の生き物を養う基盤であることを深く印象づけ、修景・集客に寄与し、生態系に配慮した管理を行うことにもなる。昆虫の専門家でなくとも飼育できる種類はあり、工夫次第で見せ方もいろいろある。今後の温室展示、屋内、屋外庭園において、チョウやトンボ、鳥までも視野に入れた設計・管理が拡がることに期待している。

12.グアテマラ共和国のアマティラン湖の水質汚染からみた環境再生及び景観保全の課題

山本高久（九州大学大学院芸術工学府）

包清博之（九州大学大学院芸術工学研究院）

グアテマラ共和国は産業開発の高まりとともに、環境汚染が深刻な問題となっている。特に首都の南に位置するアマティラン湖では、都市部から流れ込む工場・生活排水、農薬汚染、ゴミ不法投棄等による環境悪化が懸念されている。当湖周辺は観光地として地元住民、観光客のリクリエーションの場として利用され、ホテル、レストラン、別荘、遊園地が点在する。しかしながら汚染状況は悪化傾向にある。そこで本研究では当湖及び周辺を対象とし、汚染原因である生活排水・工場排水・農薬関連排水の資料分析を通じて、都市と農山漁村地域の人々のくらし、生活の安全と健康確保、環境景観の保全の問題などに対応するための示唆を得る事を目的とした。

13.群状間伐地におけるコナラ植林とウサギの食害—福岡県八女郡黒木町の共有林における森づくり活動を事例として—

岩坂 優（九州大学大学院芸術工学府）

朝廣和夫（九州大学大学院芸術工学研究院）

小森耕太（山村塾）

群状間伐による半日陰環境での苗の育成は、小規模な整備方法で成果が見えやすい、針広混交林の育成方法であり多様な生態系の保全・創出が期待される。本研究では、台風被害を受け管理放棄された福岡県八女郡黒木町のスギ・ヒノキ人工林において、群状間伐施業を行い、コナラ苗を植栽した。本報告では特にウサギの食害について報告した。3～11月の調査の結果、コナラ苗は平均12.6cm伸長したが、98本中91本のコナラが食害を受け、食害を受けても成長したコナラは半数であった。また食害を受けなかった苗の周辺植生の平均高さは、食害を受けた苗の周辺植生より約65cm高くなり、周辺植生がウサギから苗を守る効果が見られた。

14.福岡市鴻巣山におけるハリギリの生育状況

藤井義久（火山里山保全交流会）

朝廣和夫（九州大学大学院芸術工学研究院）

久保田純平（九州大学大学院芸術工学府）

梶原領太

（九州大学イノベーション人材養成センター）

西日本の低標高地の里山二次林では、自然遷移により常緑広葉樹林化が進行し、かつての薪炭林管理の名残をとどめる落葉広葉樹が被圧されて勢力を失いつつある。本研究は、四季の景観や種の多様性の見地から、特にハリギリに注目し、福岡市の鴻巣山緑地保全地区において、2000年に行なわれた生育状況の調査結果を踏まえ、2009年に追跡調査を行ない、最近9年間のハリギリの動態を把握することを目的とした。その結果、2000年に生育していた個体のうち28%が2008年には枯死・消失していた。生存個体は、相対的に生育状況が悪化したのが、少数ながら生育状況の改善がみられたのは、西側の急傾斜地に立地し、大雨・台風等の自然撓乱による隣接木のギャップや崩壊地に枝葉を伸展させた個体であった。

15.福岡市鴻巣山におけるホオノキの消長に関する研究

久保田純平（九州大学大学院芸術工学府）

梶原領太

（九州大学イノベーション人材養成センター）

藤井義久（火山里山保全交流会）

朝廣和夫（九州大学大学院芸術工学研究院）

新炭林や農用林としての生産的役割を失った現在の里山型の二次林は、管理放棄とこれに伴う自然遷移によって、落葉広葉樹が被圧され、更なる常緑広葉樹林化が進行している。福岡市の都市内残存林である鴻巣山緑地保全地区を対象に、落葉広葉樹を含む多様な植物の保全を通じて季節的景観を保全することを目的として、最近9年間でのホオノキの消長を調査し分析を行った。その結果、最近9年間にホオノキの個体数が減少し、生育状況も悪化していることが明らかになり、その要因としてはホオノキの光環境の悪化が考えられた。被圧する常緑広葉樹の除伐を行い、ホオノキの生育に十分な光量を確保するなど保全管理対策が必要であると考察された。

16. 除草剤を使用することで維持管理を軽減し、尚且つ景観を維持する

石川秀幸（株式会社 松花園）

道路植栽帯における維持管理の中で雑草対策が、一番の懸念材料である。雑草対策で効果を挙げるのは除草剤であるが、農薬取締法で国内での使用用途を守れば、使用しても問題ないはずなのに、自治体では地元からの苦情を考慮して施工の許可を出さないのが現状である。除草剤についての間違っ知識や通説を食品（塩）と比較し、安全性を証明した上で実際に施工した。その結果を基にコスト縮減・維持管理の軽減・景観維持を証明することが出来た。除草剤が、100%の安全だと肯定はできないが、公共工事縮減の観点から維持管理を考えるならば、除草剤を有効に活用して景観を維持すべきと考える。こうする事が、経済効果を挙げる手段だと思われる。

17. 在来種：クラピアによる防草対策（土壌PHにより雑草を抑制する）

石川秀幸（株式会社 松花園）

道路維持管理を遂行する上では、主要な作業となるのは雑草対策である。雑草対策を除草剤のみで行うには、100%の安全性を確立できないのが現状である。そこで植生（クラピア）による防草対策を提

案した。対策方法は、貝化石（土壌改良材）を使用して、土壌PHを調整することで薬剤を使用せずに雑草を抑制することである。強アルカリ土壌では雑草は死滅するが、クラピアはPH9程度まで生育可能である。さらにクラピアによる防草対策は、維持管理を軽減し、景観を向上しているため、今後の防草対策として主流となりうる工法である。この事例報告では、特長を生かした防草対策の経過と維持管理方法を記述している。

18. 都市内残存林におけるクリ・クヌギの管理放棄後の消長とその要因について

梶原領太

（九州大学イノベーション人材養成センター）

藤井義久（火山里山保全交流会）

久保田純平（九州大学大学院芸術工学府）

朝廣和夫（九州大学大学院芸術工学研究院）

福岡市の緑地保全地区である鴻巣山において、管理放棄された二次林におけるクリ・クヌギの消長とその要因について明らかにし、今後の効果的な保全管理のあり方について検討することを目的に調査・研究を行った。対象地では、9年前にも同様の調査を行ったが、クリ・クヌギともに枯死・消失率が当時に比べ大幅に上がっており、保全管理の緊急性が確認された。また、枯死・消失及び生育状況が悪化した主な要因は、周辺木の生長による被圧の深刻化であったことから、周辺木の除伐が最も有効な保全管理方法となることが示唆された。さらに、クリは北斜面林縁部、クヌギは尾根部に生育状況の良い生存固体が多かったことから、今後はそこを重点的に管理施業していくことで、効果的な保全管理を進めることができると考えた。

19. NDVIを指標としたシバの生育診断について

竹内真一・加藤旭・吉政進・吉野誠宗

（南九州大学環境造園学部）

競技施設、公園施設や生産業者等の現場において、良好な芝、不良な芝を見分ける場合、管理者の経験や視覚的部分などの主観的な判断に頼る所が大きく、より客観的な芝の生育状態を判断するために計測器を用いた統一的な判断基準の確立が求められるところである。本研究では芝用に開発されたNDVI測定装置を用いて、芝の生育状態の診断方法を確立

することを目的に、①生産業者の芝の出荷時の製品判断基準、②ヒメコウライ芝のNDVIの通年変化の把握と窒素濃度がNDVIに与える影響、③オーバーシーディング作業におけるNDVIの変化、を調査した。実験結果より気温、肥料濃度、播種量などがNDVIの数値に影響を与えることが示された。

20. 希少種ゲンカイワレンゲの過去の栽培状況とその後について

岩本辰一郎（岩本商店）

大澤啓志（日本大学生物資源科学部）

本研究は、希少種ゲンカイワレンゲが産する地元の高校で行われた保護運動を把握することで、本種の保全対策の基礎的資料とすることを目的に行った。聞き取り調査および既存資料の整理の結果では、1992年から1995年まで地元高校でゲンカイワレンゲの保護活動が行われ、本種の他に同属のツメレンゲが栽培されていたことが明らかになった。また、保護運動が廃止された1995年から4年間は灌水・除草等の管理のみが行われ、1999年以降は管理が行われていなかった。群落組成調査の結果では、管理放棄後9年後の2008年の花壇においてもゲンカイワレンゲを確認することができ、同様にツメレンゲも認められたが、本種の個体数は過去の栽培記録と比較して著しく減少していた。

21. 熊本県における街路樹改善の取り組み

田中 誠（熊本県土木部都市計画課景観公園室）

熊本県では1985年から全国に先駆けて「緑の3倍増計画」により緑の増大と美しい景観づくりに取り組んできた。しかし二十数年が経過し、特に街路樹においては課題が多く、技術的改善や制度の見直しに取り組んでいる。管理については、「街路樹管理計画」を路線毎に策定し、複数年工程を含め、無駄を省き真に必要な作業を適期に行うよう根本から見直すこととしている。また管理予算の範囲内では対応困難な根上がり対策や植樹改善を行うため、新たに「沿道景観緑化事業」を創設し、観光路線等で改善工事を実施するよう計画している。事例報告により広く意見を聞き改善の参考としたい。

22. 雲仙市国見町神代地方の歴史的庭園の現状と保全について

生方裕士・國分亮・池田典史・永松義博
（南九州大学環境造園学部）

近年、生活環境の変化に伴い、郷土色豊かな庭園が消失し始めている。本研究は雲仙市国見町神代に散在する歴史的庭園の保全に関する現況調査と所有者への意識調査を行った。結果は1991年の調査時と比べ、17年間に消失したり、改修された庭園は11庭園中、8庭園であった。主な理由は管理困難や水量減少などがあげられた。その他に住宅が空き家になったり、住人の高齢化により、日常的な手入れが行き届かなくなった庭園や個人の水路もみられる。水源となる水路の保全と水量の確保などの環境の整備は、歴史的庭園の保存を考える上で緊急の課題であるといえる。

23. 朝倉市秋月地方の歴史的庭園の現状と保存について

國分 亮・堀切勇作・永松義博

（南九州大学環境造園学部）

田島基記（熊本県立北陵高等学校）

近年、生活環境の変化に伴い、郷土色豊かな庭園が消失し始めている。本研究は朝倉市秋月に散在する歴史的庭園の保全に関する現況調査と所有者への意識調査を行った。結果は1993年の調査時と比べ、15年間に消失したり、改修された庭園は19庭園中、17庭園であった。主な理由は水質の悪化や水量減少や住宅の増改築などがあげられた。その他に住人の高齢化や不在により、荒廃している庭園も多くみられた。池泉式庭園において水量の不足は水路環境を悪化させ、町並み景観を損ねることにもなる。水源となる水路の保全と水量の確保が今後の課題であることが明らかになった。

24. 都市近郊林におけるテイカカズラの分布に関する一考察～福岡市鴻巣山特別緑地保全地区を事例に

張 明雪（九州大学芸術工学府）

朝廣和夫（九州大学大学院芸術工学研究院）

福岡市の都市林である鴻巣山特別緑地保全地区における林床植生の優占種であるテイカカズラに着目し、その分布と相観植生との関係を把握することを目的とした。相観植生別に植物社会学的調査を実施した結果、次のような傾向が得られた。テイカカズラの被度が50%以上ある植生は、クスノキ、タブノ

キ、ヤマザクラの優占する高木林、そして、間伐されているコナラ林である。一方、50%未満の植生は、マテバシイ林、シイ林、切り株のないコナラ林であり、裸地化の傾向が見られた。林内の一部では市民団体による間伐管理が行われており、そのエリアでもテイカカズラの被度の高い傾向が得られた。

25. トケイソウに関する基礎研究

—蒸散特性の把握と挿し木による繁殖実験—

増山港・竹内真一（南九州大学環境造園学部）

川信修二（南九州大学園芸学部）

パーゴラに誘引したトケイソウの蒸散特性をポロメータおよび樹液流測定により把握するとともに、挿し木による繁殖実験を行い、迅速に緑陰を形成する方法について実験的に検討した。東側面の葉の蒸散作用は、午前中に卓越しているのに対し、上部と西側面の葉の蒸散作用は日中を通じて大きな差異がないことが示された。これはパーゴラ内側からの入射光が葉の裏面に分配され、さらに散乱光が加わるため、午前中においても比較的高い蒸散作用が西側面の葉部において生じていると考えられた。挿し木実験では、発根率は92%に達し、トケイソウの強韌性が確認された。さらに0.25~2mの展開枝葉を挿し穂として利用した結果、全て発根を確認した。

26. 熊野参詣道における光学的手法を用いた林床植生のモニタリングと植生評価

森 博隆（山口大学大学院農学研究科）

山本 晴彦・岩谷 潔・高山 成・吉越 恆
（山口大学農学部）

本研究では、熊野参詣道においてデジタル画像及び分光放射データを用いた林床植生の近接センシングを実施した。植生の評価には、分光放射データから算出したNDVISR値、デジタル画像の画像間演算により算出したNDVIIM値を用いた。その結果、観光客が多く、踏圧による影響が大きい大門坂では植生の活性が低く、観光客の入り込みが小さい円座石周辺では植生の活性が高いことが示された。NDVISR値は測定時の光条件の制約を受けやすいことが分かった。NDVIIM値は調査区全体で同様の傾向を示し、2007年に比べ2008年では植生の衰退傾向が示されたことから、デジタル画像を用いた植生評価が有効であることが示唆された。

27. 地域再生への取り組み～大木町の町民参画の事例を通して～

棚町修一（株アーバンデザインコンサルタント）

本計画は、町民の念願であった図書・文化等の拠点施設を平成19年度、20年度の2ヵ年かけ、町民主導で行った地域再生の取り組みである。対象となった施設は、町の中心部に位置する3つの公共施設（就業改善センター・第2アリーナ・保健センター）で、現代のニーズや生活スタイルに合うように建物内をリニューアルし、3つの機能（図書・情報機能、創作・展示・ホール機能、町民活動支援機能）の充実を目指した。計画では、従来の住民参加型まちづくりの仕組みをさらに発展させ、徹底した情報公開と町民の代表である町民委員会主導の企画・運営によるまちづくりを実践するために企画・技術・運営面から行政、コンサルタントがサポートを行った。

28. 南九州大学附属実習場における造園教育活動と都城キャンパスへの展開

西村吉英・篠崎圭太郎・徳原隆・岡島直方

平岡直樹・関西剛康・竹内真一
（南九州大学環境造園学部）

南九州大学環境造園学部附属実習場は、昭和42年の開学当初に設置されて以来、造園業界において即戦力となりうる人材を育成する為に、造園実習教育ならびに造園技術指導を展開してきた。現在、本学は高鍋町から都城市への移転作業が進行中である。本報では、附属実習場の概要とこれまでの造園教育活動の内容を報告するとともに、今年度開学した都城キャンパス内のヒーリングガーデンや、新実習場であるフィールドセンター（1.7ha）の概要、実施される造園教育の概要を紹介した。伝統技能である造園技術の継承と、多様性に富んだ学生の満足度を充足させるような斬新かつ機能的な造園実習プログラムの開発が我々の使命であると認識している。